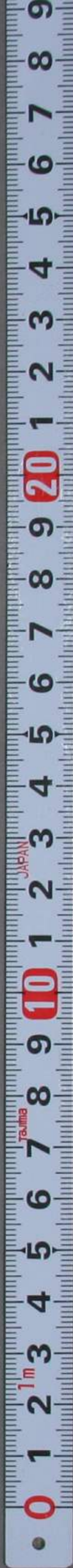


江戸名所圖會

九

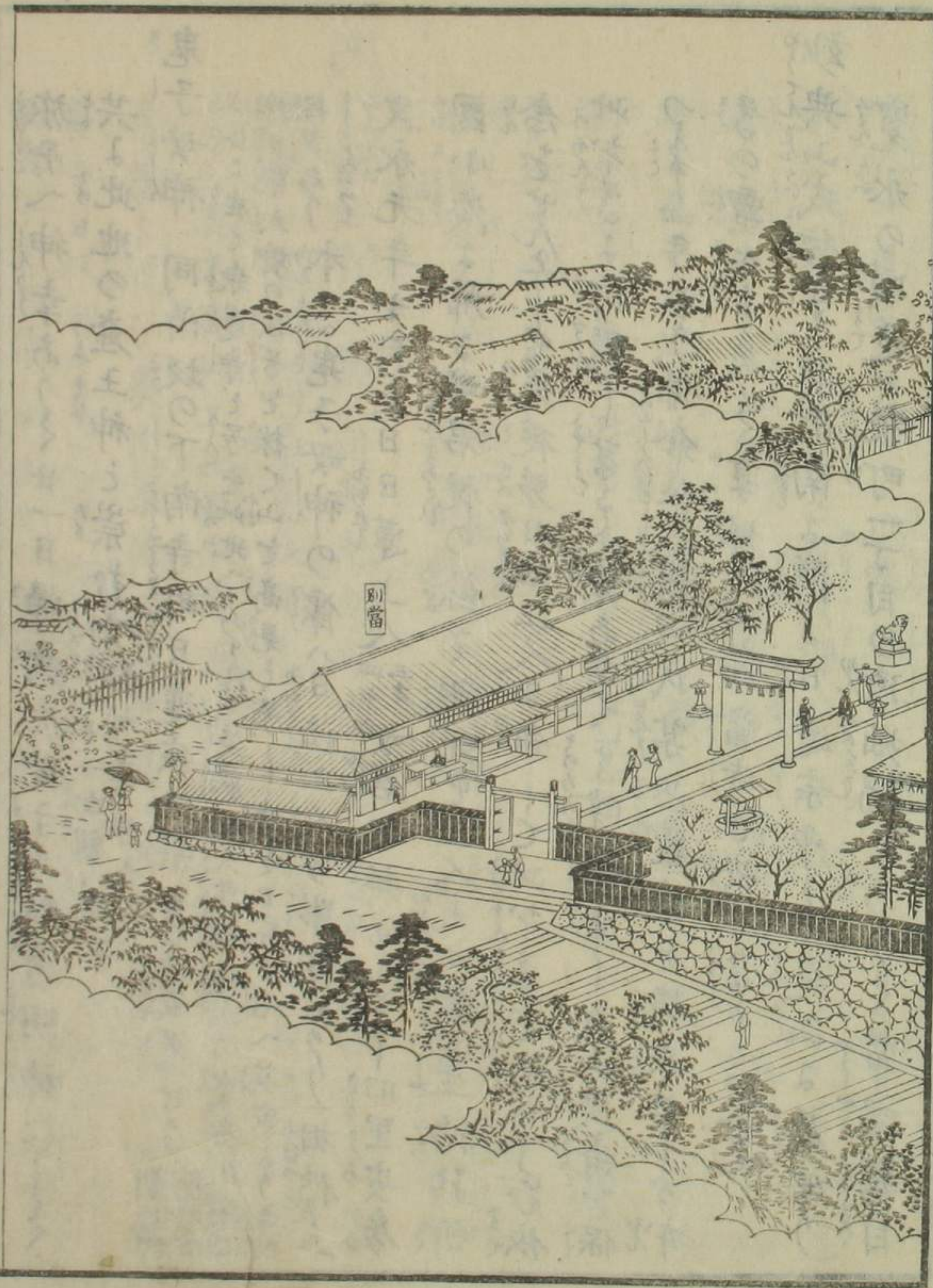
ル 4  
5105  
9





四谷 四谷河門の外より西の方内藤新宿のあり近の惣名へ里  
 老云此地の四方は谷あり故は四谷と号する  
 地小谷有しが寛永十三年外廓營造の時序堀の揚土を以て東西の両谷を埋め  
 るるが平地とあり一と曰名はうらやまといふ盛町の入口を今も堀町と号する其  
 故也又古へ坂あり有り一頃八民家一軒ありて夫婦の居居せしは夫婦  
 坂といふと云  
 或人云入園の頃ハ今の靴町西側番町永田町に至る本多跡八郎高木九助両家  
 の下屋敷として下置れり共跡城近きにより市谷の臺此原を永代の  
 御説あり下りあり表四百八十間は只四人指置られり四家と云り  
 此地ハ永祿の頃霞村とよひると云はれり或云往古此地ハ武蔵  
 野は續け一曠原あり此所彼所ハ土民の家四家あり故  
 四家と云へり共の事跡合考は往古今の尾州公屋敷表門の地及び  
 高井戸の方より四家と稱し往來のやせありとあり  
 井頭天王社 同所傳馬町一丁目二丁目の間の左側の横小路を入る  
 二丁斗を西より 故は俗字として此小祭神素盞鳴尊 本地佛ハ薬師  
 本は四谷の人家用け 路は天王横町といふ 祭神素盞鳴尊 弘法作樂の  
 より産土神といふ 神主ハ芝崎氏の神田明神 別當を寶藏院  
 号を 寶藏院 祭禮ハ毎歳六月十八日同所石切町傳馬町二丁目の  
 横町を云

昭和41年12月20日寄  
原安三郎氏贈



社王天頭牛と谷や四



旅所へ神幸ありて廿一日帰輿を地主ハ稻荷明神に  
共ニ此地の産土神と崇む本地ハ十一面觀音

鬼子母神

同所坂の下南寺町日蓮宗日宗寺ニ安置せり當寺日

水谷ニ在テ乘蓮寺ト号セ此地ヘうつされて後藤堂大學頭高次の室高見院ハ  
月日宗大郊の法号を採テ山を高見ト号シ寺を日宗ト唱ヘ其家より寺院  
再興あり本寺鬼子母神の像ハ日法上人の彫像なり相傳ふ

文永元年十月三日日蓮上人四十女君を拜せんと一曰里安房

國小湊ニ歸る母君悦の餘ニ頓死を上人あひ歎て生活ヲ祈

念をせんと一先從弟日法上人めい命じて此寺を造らし依

此寺を祈願しささ驗ありてさ曉蕪室あ後壽を保

つ事四年あり鎌倉住人鎌田氏某此靈像を傳來せしが本

寺の靈ふより享保十三年當寺ニ安ん置せと

妙典山戒行寺

同所南ニ隣る日蓮宗ゆん延山ニ属せり

寛永の頃迄ハ糶町一丁目の御堀端ニありて常唱題目

修の庵室なり一近隣宮重氏庵主と共に力を合せ

遂一寺と當寺の日貞師ハ山本勘助晴幸入道道鬼

齋ま孫ゆ延山日悦上人の從弟ニ寛保中ハ十ハ余ハ歳ハ當寺ハ明

曆ハ至リ此地ニ遷ル徳門の額ハ妙典山と書セ朝鮮

國李彦の書ニ此所の坂を戒行寺坂又其下の谷を戒行

寺谷と唱へり

分身鬼子母神寺中圓立院ハ安置中定朝の作ニ始四谷北伊賀町  
秘田安齋とのハ西師の家ニ傳來を来由ハ長々

汐干觀世音菩薩 同所南寺町戒行寺の裏の坂口真言宗

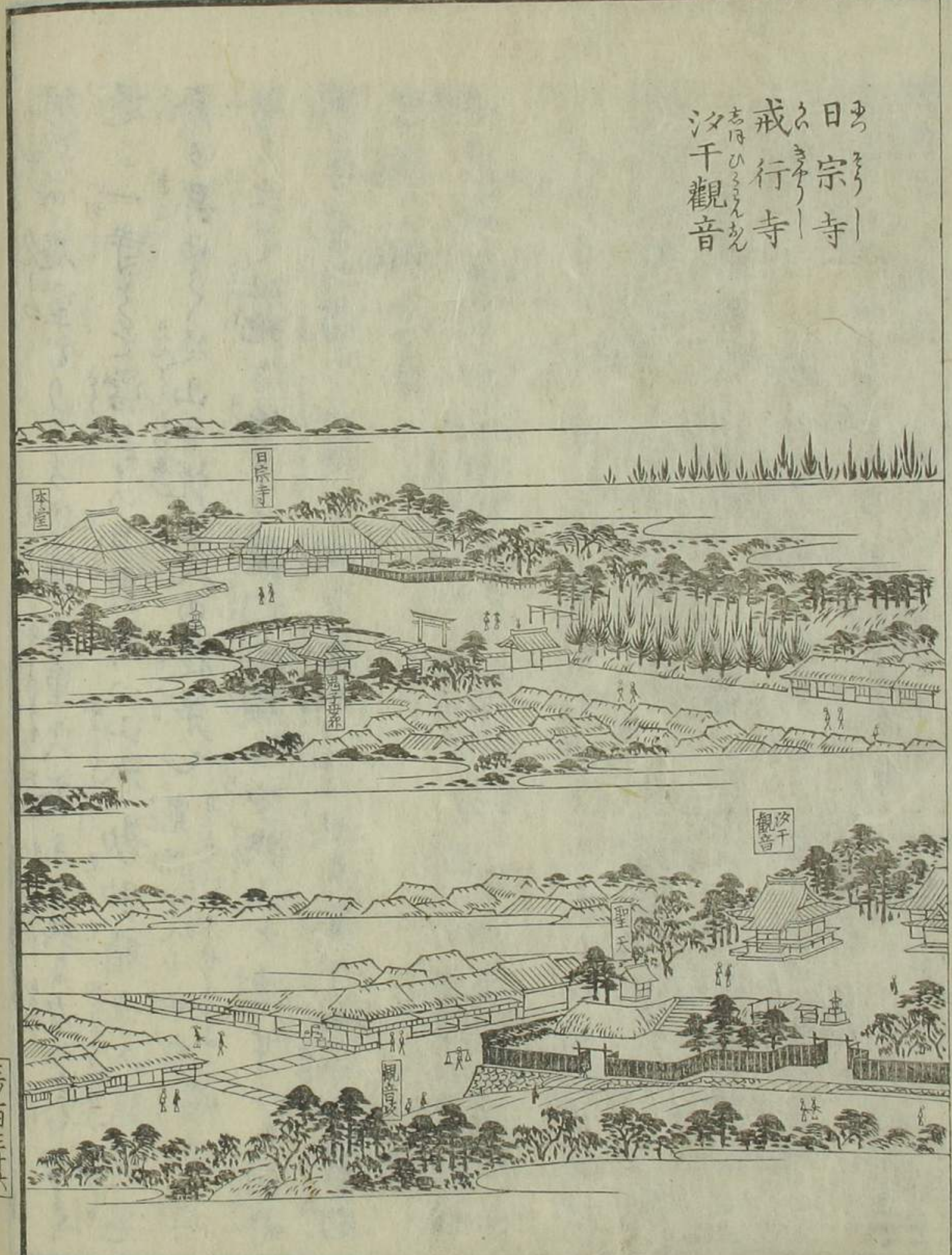
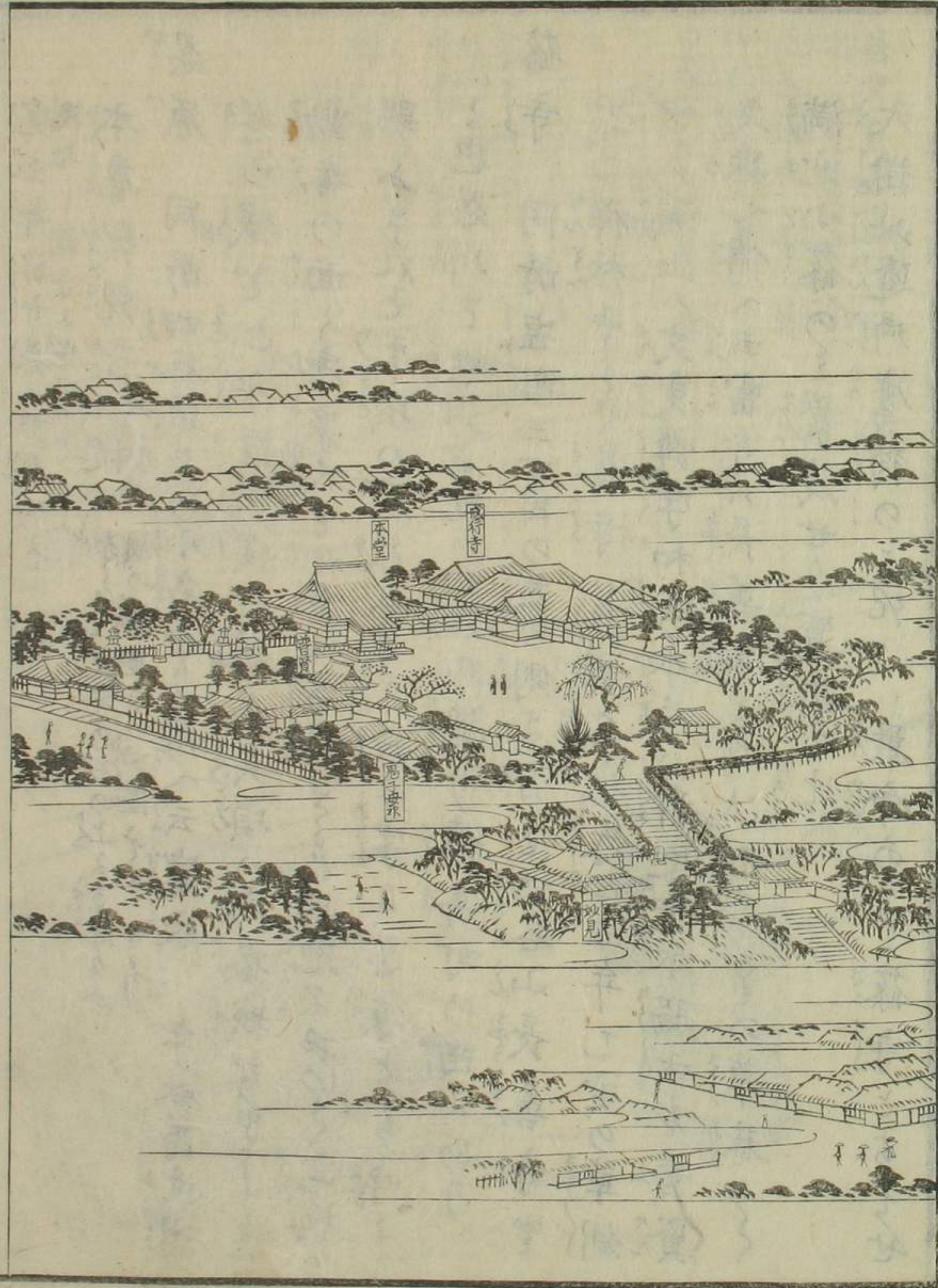
錦敬山真成院ハ此寺ハ越後國村上義清ハ守佛ハ

其未流村上兵部入道道樂齋大坂御陣の時上杉

景勝ハ後ハ奥州米澤ハ彼地ハ趣ク後江戸ハ歸リ

當寺ハ収ムとシ鐵人云此ハ此ハ監踏觀世音ハ村上肥後守

賴清常ハ崇信ハ一ハ後堂宇を造リ安置シ大坂御陣ハ村上



寛政 齋當寺 三世 觀心

本尊 聖觀音 此石 觀の 盛 一尺斗の石の上は立せり

忍原 同所 四谷 通りの 小名 あり 傳へ 云 寛永 十年 癸酉 武州

勤番の 面々 御家人 江戸へ 召歸 せし 此地 御番城 なる 宅地

賜ふ され 廣原 あり 故 字 忍原 と 呼

と也 忍川 と 唱 地 四谷 の 通り 傳馬 町の 西 あり

篠寺 同所 盛町 三丁目 の 左の 側 有 四谷 山 長善 寺

と 禪林 中々 用山 文叟 憐学 和尚 本 釋迦 如来 脇士 普賢

文珠 傳へ 云 當寺 長善 庵 呼 形 草菴

満地 小篠 の 繁茂 せり 寛永 の 比

大樹 此邊 御鷹 狩 の 比 嚴命 あり 篠寺 と せ

篠寺 と 四谷 盛町 の 通り 道 左の 傍 あり 長善 禪寺 と 号 昔 伊故 鷹の 頂 寺 の 庵室 満庭 小篠 の 繁茂 せり 寛永 の 比 嚴命 あり 篠寺 と せ



あひ此地を寺境ありより後此名あり故に吾證として今も  
堂前より方三尺斗の地は小藤の隈河を總門の額に笹寺と書  
せし永平寺兼天和尚の筆なり

四谷大木戸 又大関戸 甲州及び青梅への街道なり土俗云霞ヶ関  
或ハ旭の関を云と登御入國の頃迄ハ此地の左右ハ谷やぐ  
一筋道あり此關あり往還の人を糾問せし近頃を江戸

あり附物を駄賃馬の荷物送状あきと通さるゝとなり  
今も猶駄賃馬の荷鞍あきとハ江戸宿又ハ荷問屋等此手  
形を出して通る其遺風あり此故やこれ番屋ハ町の  
持られし突捧指辰銀ホを飾置し是往古關のありし時の  
遺風あり又同所西の方北往還の道を横よりて石橋此  
下と右へ流る小溝を櫻川とよへり

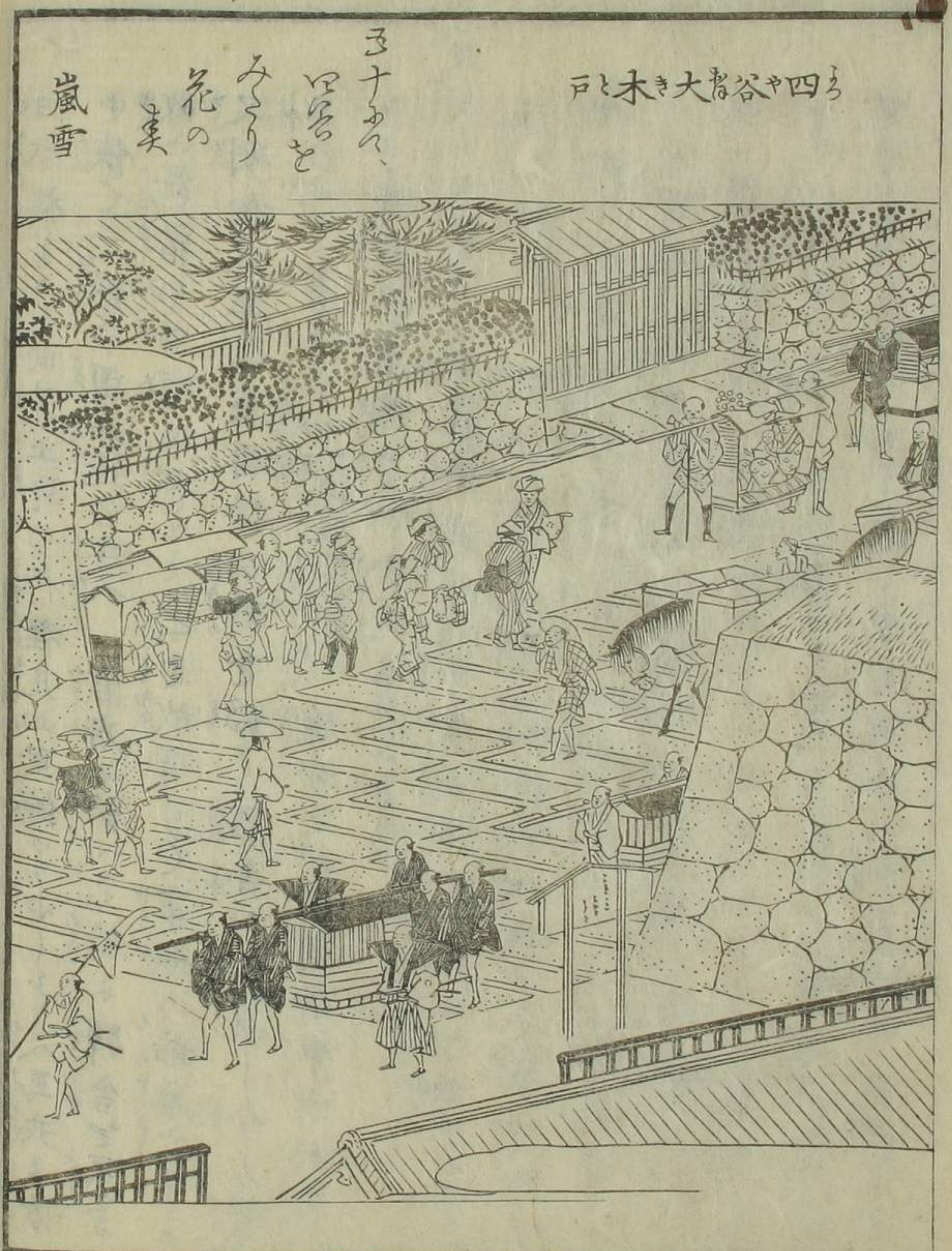
内藤新宿 甲州街道の官驛あり  
此地ハ旧内藤家の新宅の地あり  
後町屋とある故に名とす

日本橋より高井土造の行程凡四里餘あり人馬共み勞  
を依て元祿の頃此地の土人 官府の許へ新驛舎を取立る

故に新宿の名有り然るとして故有りて享保の始廢せし  
又明和九年壬辰再ひ公許をばく驛舎を再興し今を繁  
昌の地と名せり 此所より高井戸へ 追分といふハ同所甲州街道ハ  
一里廿五町あり

霞関山大宗寺 内藤新宿右側中程大木戸より二丁餘あり  
浄土宗ゆゑ縁山は屬を本寺ハ阿弥陀如来にて惠心僧都の

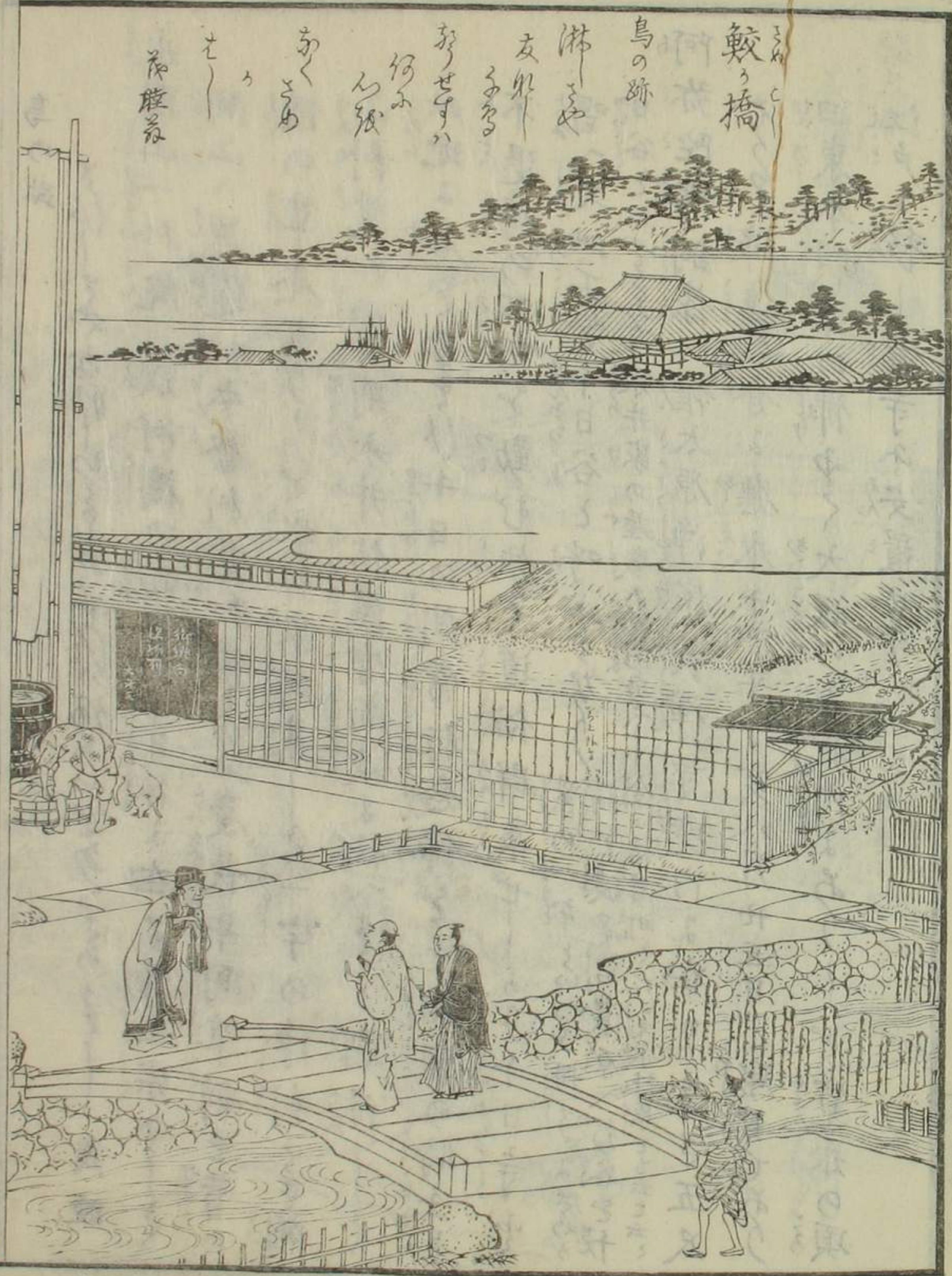
作開山念誓故心学玄和尚と号昔ハ多門川あり草菴あり  
と寛永の頃内藤大和守重頼此地を賜りて時此地に  
住る道心者ありし重頼若干の地を与へし廣路あり  
以て大宗なりと云ふハ重頼よりありしをさるんハ寺号を大宗と  
付ありしより号とすと當寺牌堂の初なる弥陀善逝の像ハ



五十九  
 四谷大木戸  
 花の  
 美  
 嵐雪







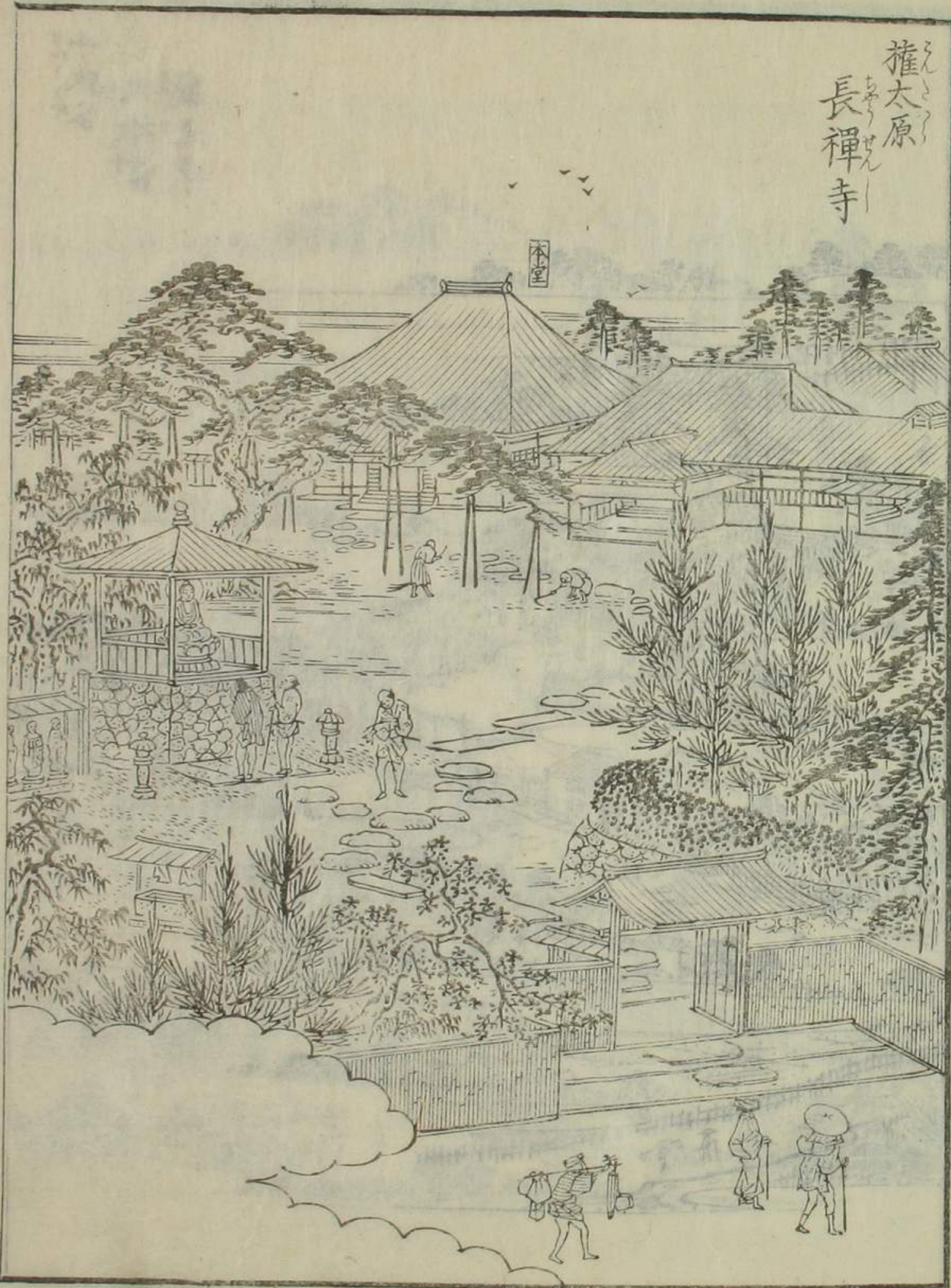
鳥の跡  
 較橋  
 淋  
 友外  
 おうせす  
 何ふ  
 心強  
 あく  
 さめ  
 藤原

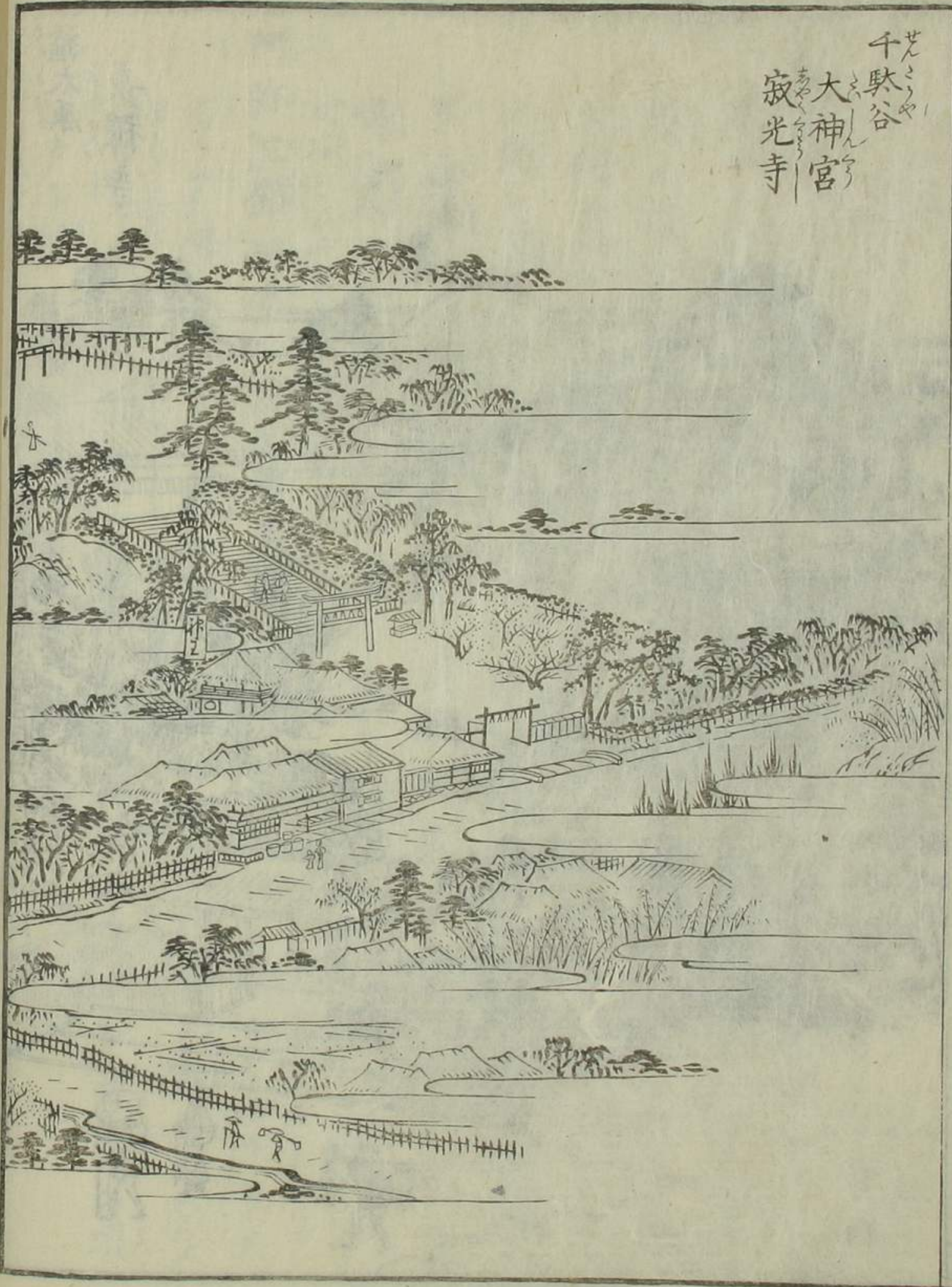
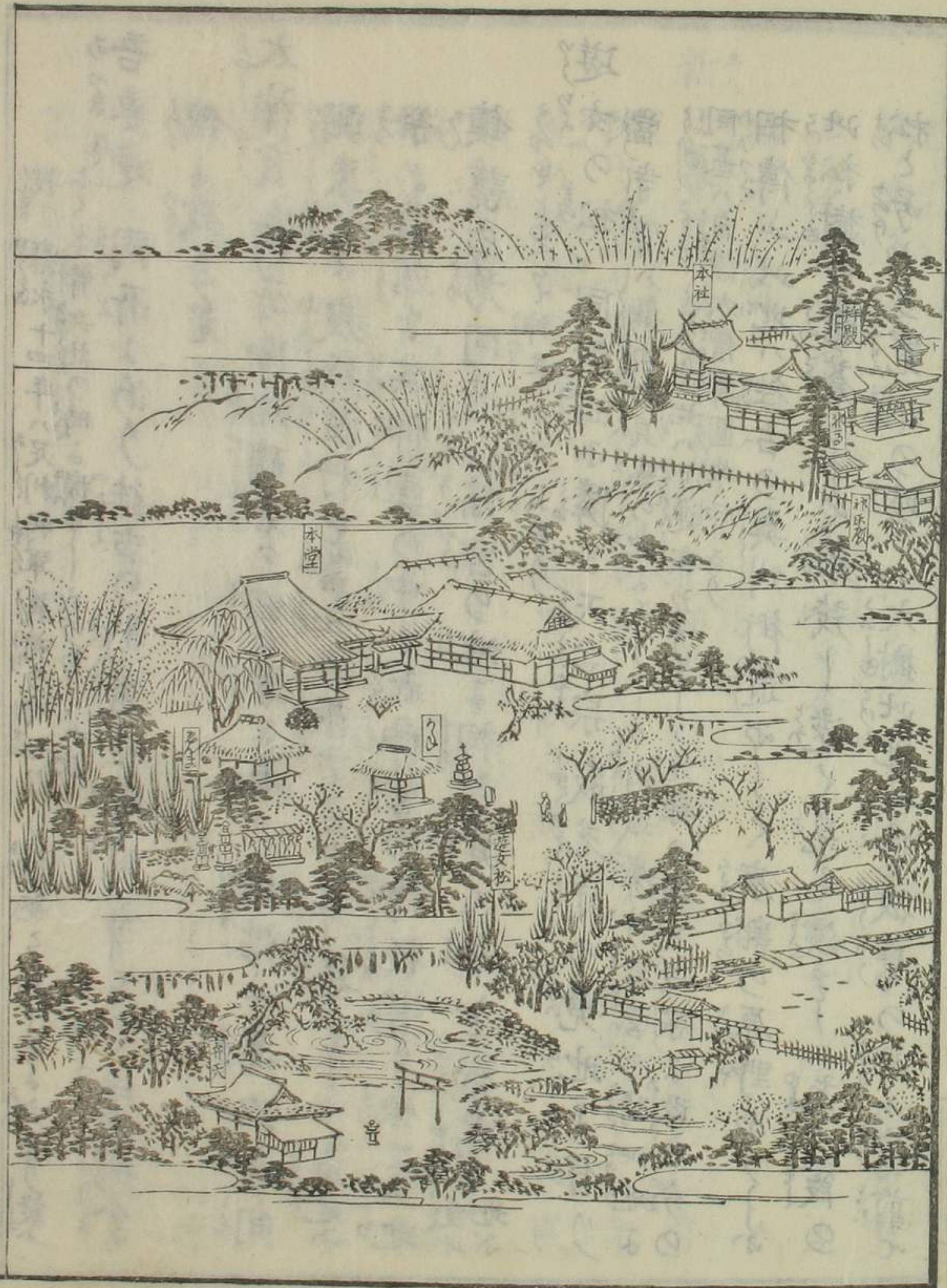
護本山天龍寺 同所追分より南の方甲州街道北左あり  
 濟家の禪窟中へて本寺千手觀音開山ハ春屋和尚あり當寺  
 其先ハ遠州の天龍川の辺あり後江戸に遷一牛込  
 天和三年癸亥二月十六日火災よかり竟此地小  
 境内に地藏  
 堂と觀音堂有又講の内一里塚有り  
 紀州公卿中諾の後西南の方坂の下を流る小溝  
 架まを云今此辺の惣名とありり里諺昔此地海まつき  
 たりハ較の浜とあり小名とせし証と云ふた  
 或人云く天和二年公家の日記録上木村兼高とありと云ん然時此  
 辺一木の内なりと抄あり又佐目何よ作る千駄ヶ谷寂光寺鐘の銘較  
 村ともあり

鳥の跡

永固山一行院 敷河橋の西の方千日谷に在る浄土宗の  
 閑山源蓮社本誓利覚和尚より慶長年間草創を昔の  
 僅の草庵なりしと永井家閑基し一宇の浄刹と閑  
 山利覚和尚の則永井信濃守尚政に仕へりり刺洗し  
 此地に庵をむき千日の間常行念佛とを結願の時千日  
 不退轉の回向を勤む依り道俗群集せりり千日寺と  
 唱へ又此處を千日谷と呼ぶなり  
 阿彌陀佛銅像 権太原浄家長禪寺境内に在り高さ五尺  
 なる佛像の脊に應永十四年丁亥八月廿五日と彫付てあり  
 旧東本願寺の佛ゆゑ大坂の御城内にありしと寛永の頃  
 江戸に移し當寺に安置せり

権太原  
長禪寺





千駄谷  
大神宮  
寂光寺

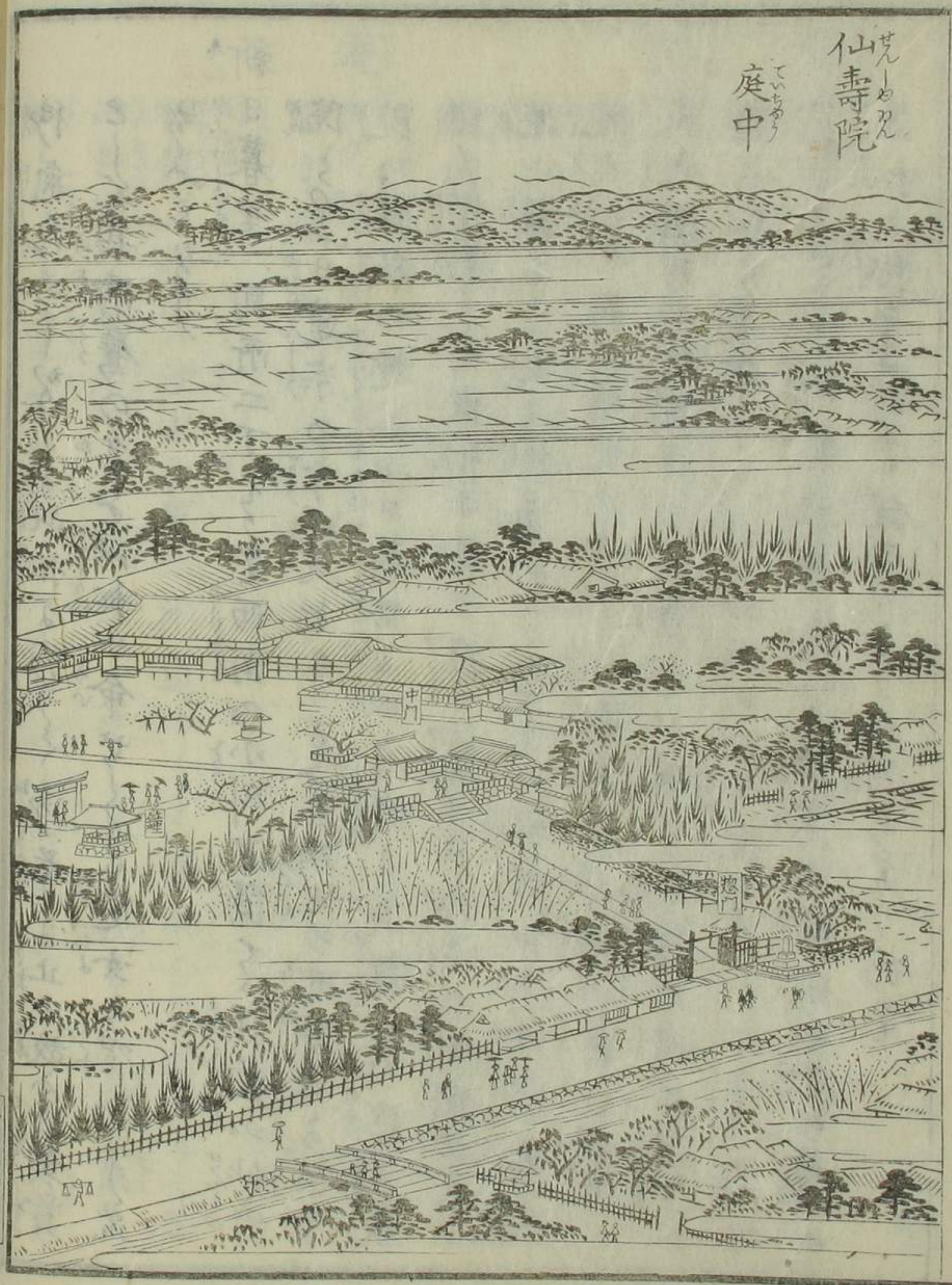
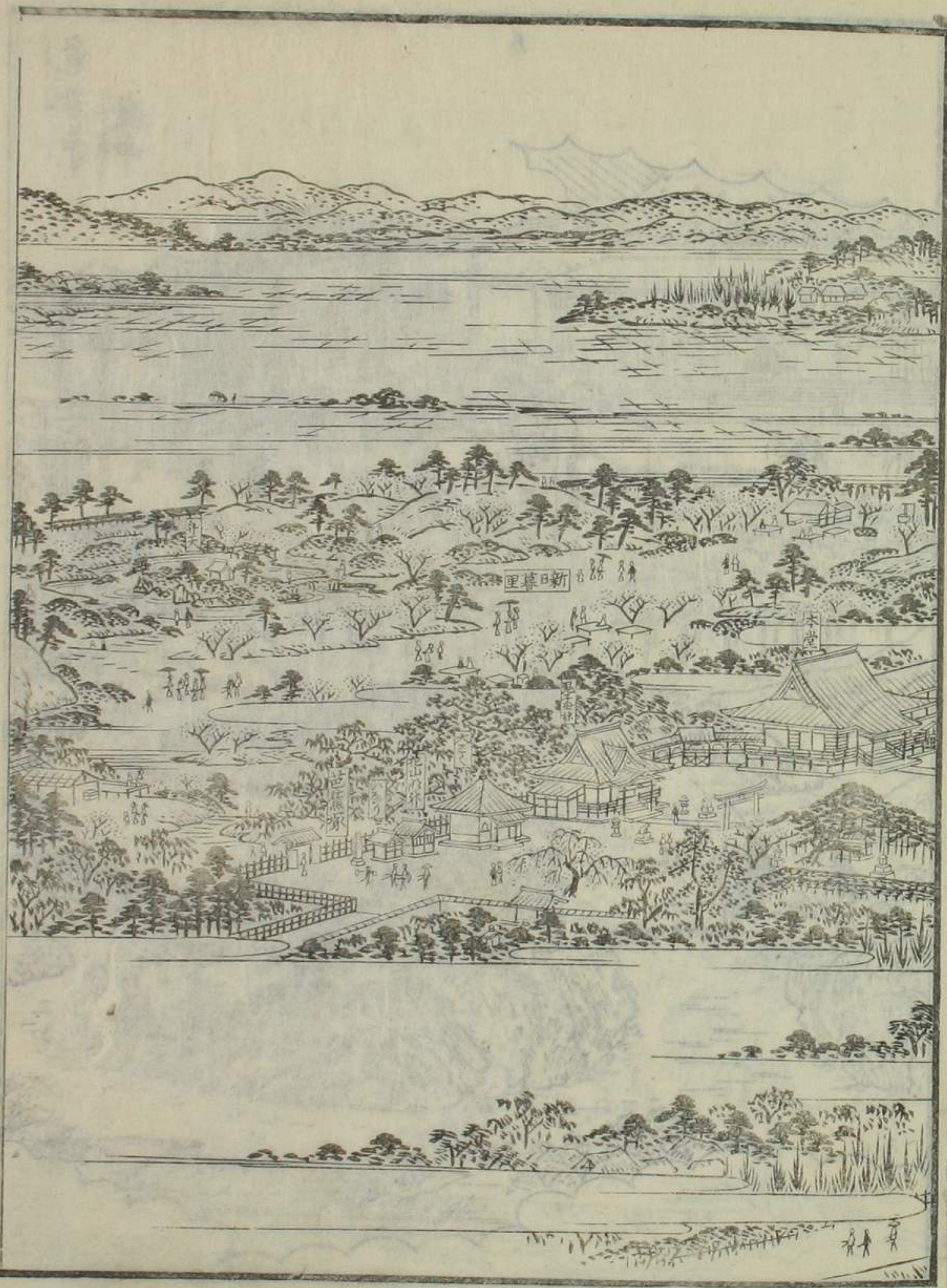
按、應永十四年、足利將軍義持の時、世なり、佛軀るや、とよ穴あり、疑ふ  
吾妻堤、同所あり、往古の街道の餘波なり、とく堤の形令  
僅よ残し、とく

太神宮、同所、涉、焰硝倉の西の方より有、相傳、萬治年間  
關東大疫疾流行、富士の根方より神送、とく、此地  
祭、ぬ然、其神輿の中、太神宮の所、後有り、依て、此地  
鎮護の為、同所、八幡宮の地、祠を建て、是を勸請、とく、此地

遊女の松、同所、西小隣、天台宗、寂光寺の境地、有、  
當寺、昔ハ、麴町の貝塚の地、あり、とく、元祿の頃、天台宗、改む、今の  
相傳、此地、往古の奥州街道、あり、とく、廣豁の原野、あり、とく、  
此松樹の鬱蒼、とく、采茂、遠く見え、渡、とく、あ、霞の  
松と号、とく、寛永の頃、大樹、此地、涉、放鷹の時、鷹、翦て

涉氣色、あり、とく、此松、あり、とく、涉、拳、止、故、小、瘞、賞  
とく、其、涉、鷹、の名、を、此、松、小、命、せ、とく、遊、女、と、唱、へ、とく、光

新日暮里、同所、二丁、とく、西南の小川を隔、とく、法雲山、仙、寺  
院、とく、日蓮宗の寺、此、庭、を、あり、とく、此、辺、の、地、勢、と、よ、ひ、寺  
院、の、林、泉、の、趣、谷、中、日暮里、は、似、とく、頗、美、觀、とく、故、日暮  
里、は、相、對、とく、假、初、新、日暮、と、字、せ、り、弥、生、の、頃、爛、慢、とく、  
花、の、盛、とく、ふ、大、小、群、集、せ、り、當、寺、ハ、紀、州、公、御、母、堂、養、珠  
院、日、心、大、妙、正、保、紀、元、甲、申、草、創、あり、當、寺、の、鬼、子、母、神、ハ  
同、大、妙、甲、の、延、嶺、中、とく、靈、尔、を、感、とく、大、野、の、辺、也、土、中、に  
得、ら、れ、て、後、當、寺、開、創、落、成、の、日、安、置、あり、とく、同、所  
一、町、と、く、東、南、龍、岩、寺、と、く、濟、家、の、禅、宗、の、寺、の、庭、中、ハ  
笠、松、と、稱、せ、る、あり、とく、枝、の、ま、り、三、間、あり、とく、あり、と





千駄ヶ谷観音堂 寂光寺より二町をかり西北の方よりありて観

谷山聖輪寺と号する真言宗の寺に安置也

本尊如意輪観音ハ當寺開山行基大士の彫像也

三尺五寸ありて世俗目玉の観音と号する

往古慶長三年の

春盜賊來り此

堂宇を再興す此

地は里目玉の

觀音と号す

たてまつり

當寺と号す

縁起曰神龜二年乙丑行基大士東國遊化の頃同年初夏

暫く此地の息ひあみ時如意輪觀世音傍の谷より

出現しあみ大士の聖尔ありて依りて佛意に應じかこみあり

古株を佛材とて此がまを彫刻し置るあみ觀谷聖輪

の号ありとの事

千駄ヶ谷八幡宮 同所一丁許西よりありて此辺の惣鎮守也

例祭ハ九月廿七日あり別當ハ真言宗高雲山瑞圓寺

と号す

鈴懸松 門前松の老樹有る寛永の頃大樹此地は故鷹の時

社記云往昔此地深林の中は時とて瑞雲現し又

戒時碧空より白氣降りて雲上は散ち村民怪むく彼

林の下に至るゆ忽然とて白鳩數多西をとてて飛され

依りて其靈瑞を稱し小祠を營て名つけ鳩森とて貞觀

二年慈覺大師東國遊化の頃村民等大師鳩森の神

跡を乞求む依りて宇佐八幡宮城州鳩の嶺に移りて

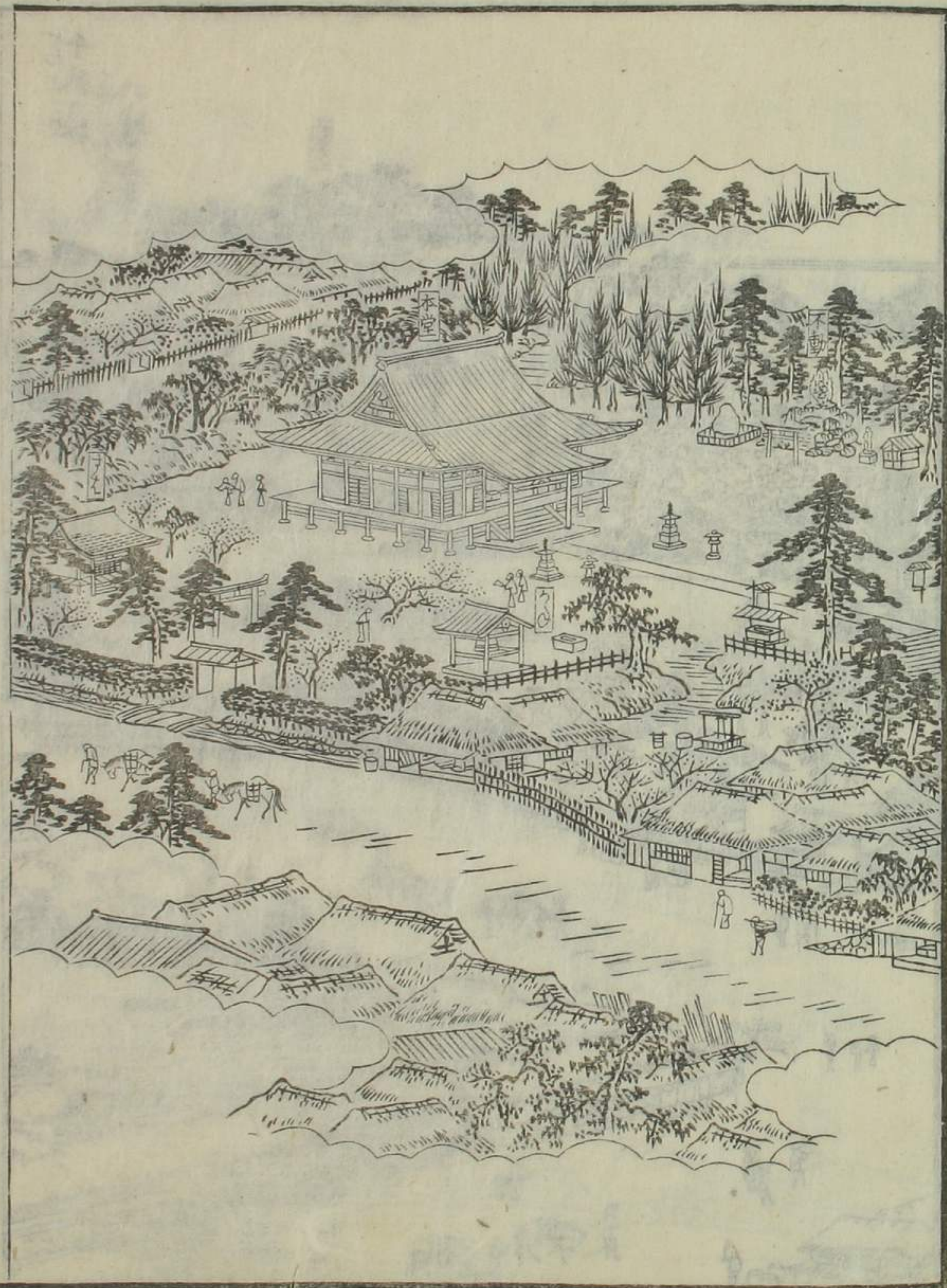
古を名ひて神功皇后應神天皇春日明神等の尊跡を

作り添て正八幡宮と崇りて遙く後久寿年間渋谷

正俊領地に鎮座の神なるを以て金丸生前隨身の

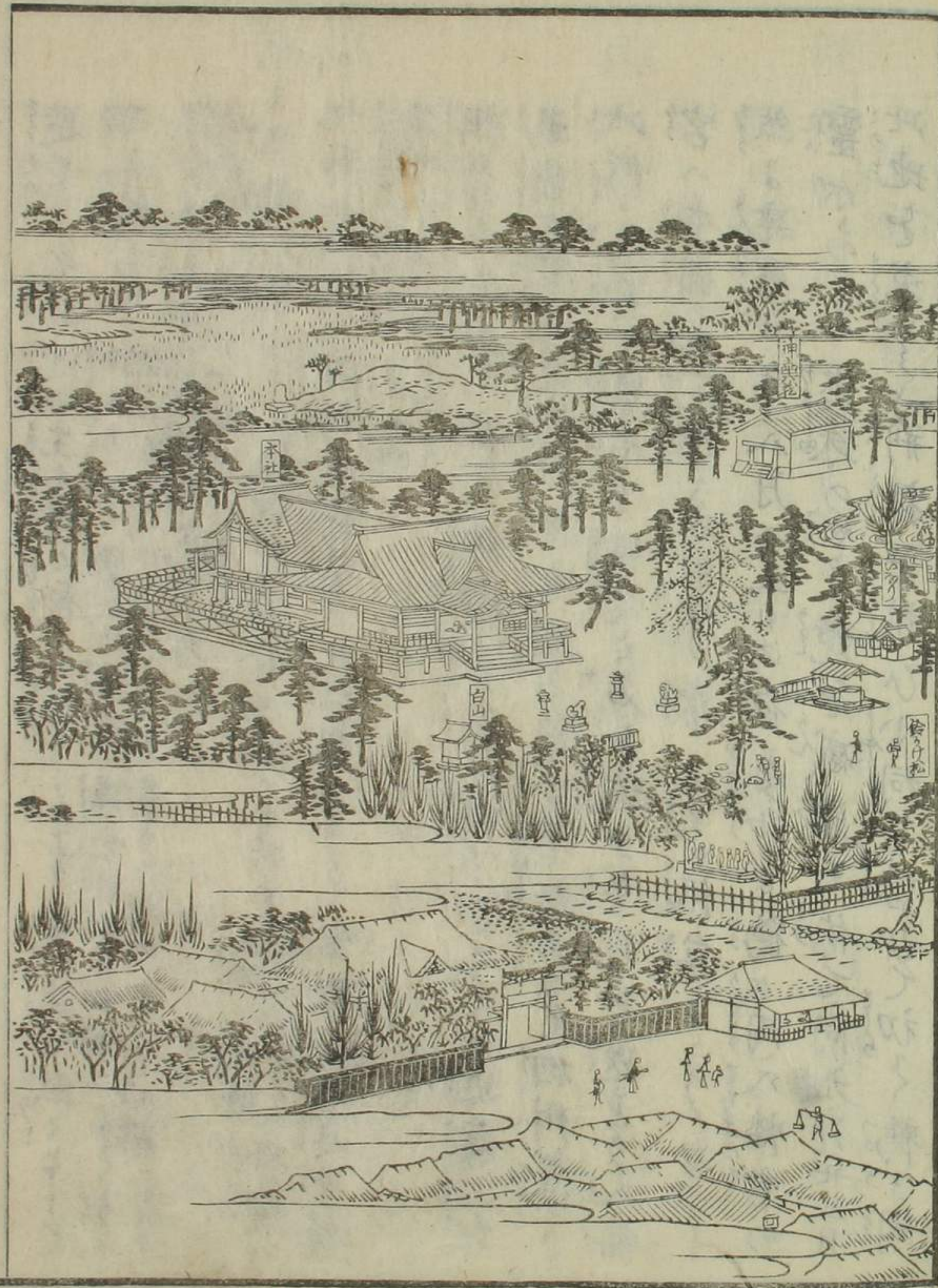
本尊惠心僧都の作の弥陀如来の像を本地佛とて社を





千駄谷  
観音堂





造營一々此地の生土神と稱し（此の地は武藏野の中なり）より靈應ハ歎くこと  
日ノ新あり（南無向亭云々）當社の前路ハ鎌倉街道の田跡中（今も）  
所領の中ハ北条家分限帳島津源四郎（此の地とへく大窪へかり）  
代々木野八幡宮 同西の方代々木野のあり

九月廿三日ハ修治を別當ハ天台宗中々（此の野も武藏野の中なり）宝珠山福泉寺智  
妙院と号せ（古ハ知明）

相傳ハ當社ハ往古源頼家公の旗下なり（近藤三郎）  
是茂の家人荒井外記智明と（は）者故ありて相州を退き

此代々木野ハ蟄居一宗友と名を改め年月を送りハ幡  
宮ハ本國の産土神と（より）常ニ（は）信怠（る）なり

然ハ建曆二年八月十五日の夜夢中ハ鶴ヶ岡八幡宮の  
靈ハありて宝珠の鏡を感得せ依て同九月廿三日

此地を求めて荆棘を拂ひ小祠を營む初ハ鶴ヶ岡

鞍懸松 同所の岡ニ在り傳ヘ云源義家朝臣奥州征伐の

頃此地ハ陣を取此松樹の枝ハ鞍をかげら（り）此

代々太橋 甲州街道萩窪の立場より三丁あり先の方松

原赤堤泉廻り代々等の五箇村入合の辻ハありて曲折する

高井戸 此ハ甲州街道中々驛舎あり

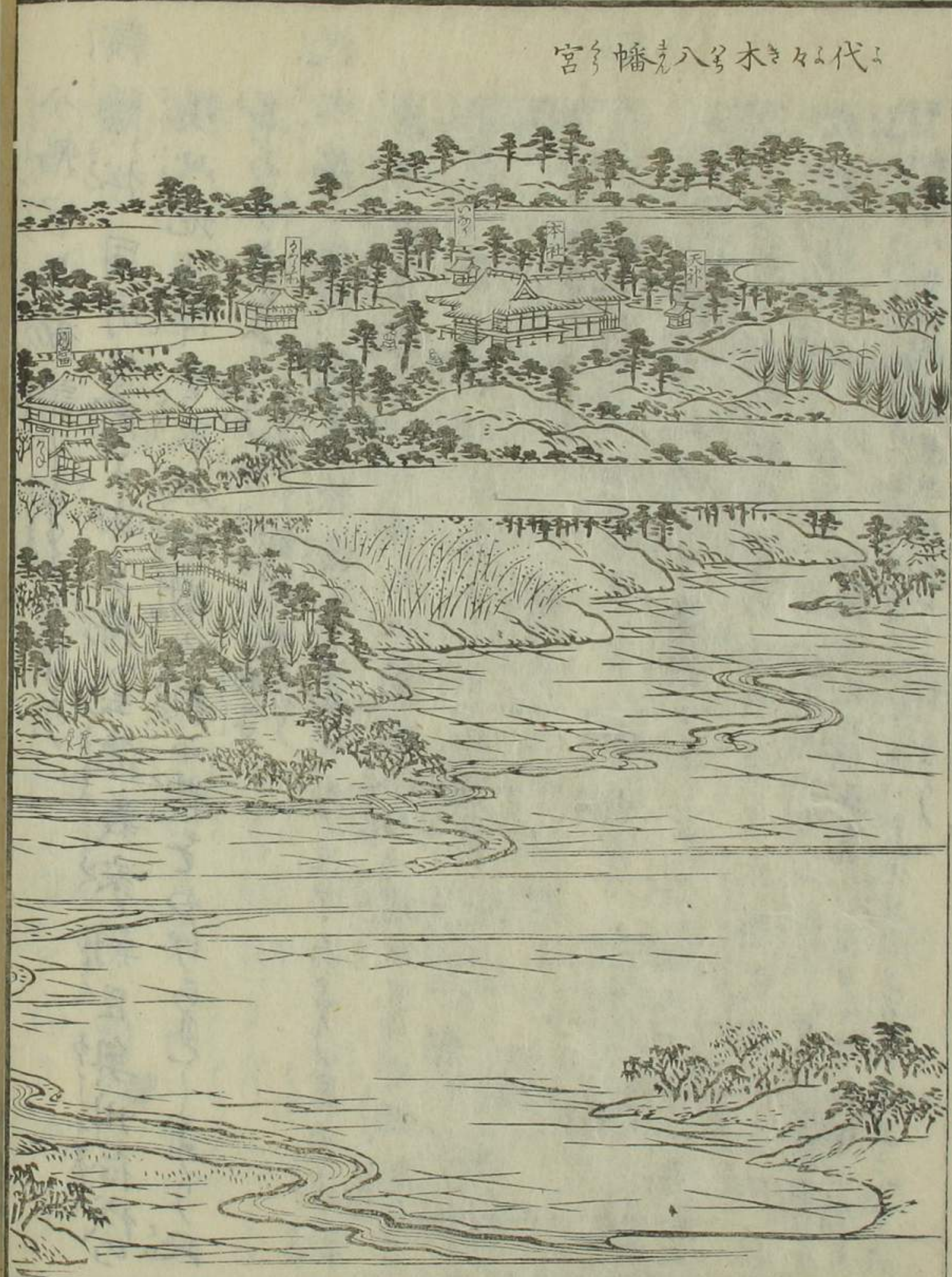
西ハありて小田原北条家の分限帳ハ大橋氏某の所領ニ

無連高井堂とあり（無連ハ每礼高井堂ハ此地のありて道真准后の

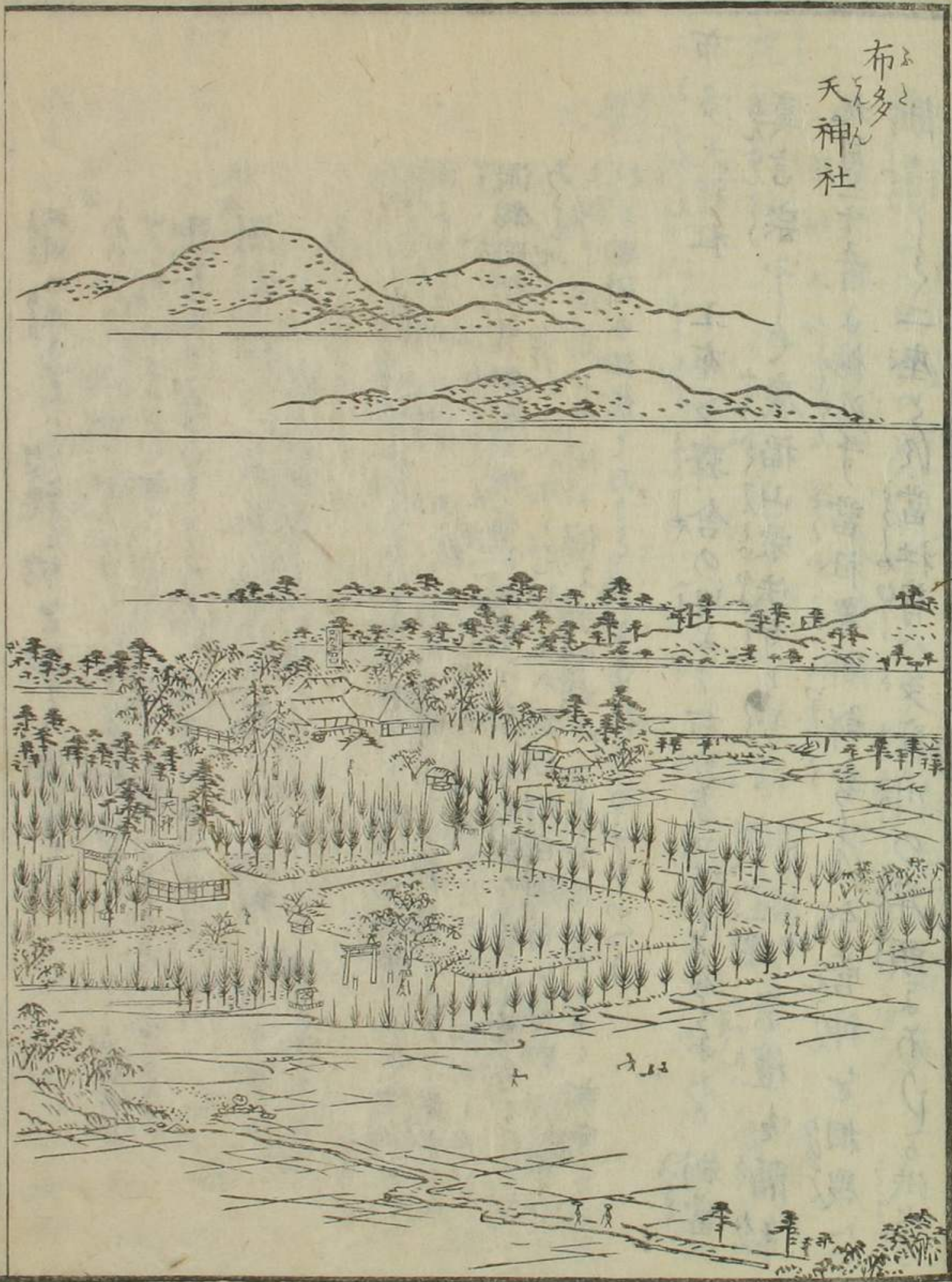
和奇ハ卷四卷張魚井の築下ニ詳なり）



宮之幡 八号 木き 代ふ







布多  
天神社

和名類聚抄曰 多磨郡 新田 尔布多云云

武蔵國 按云風土記云此所の雨布田及び和名抄云載る所の新田共此地の  
 産物云云云云後世上略して尔布多を布田と云ふも唱し又風  
 土記云尔布田川の名あれとも今考へり

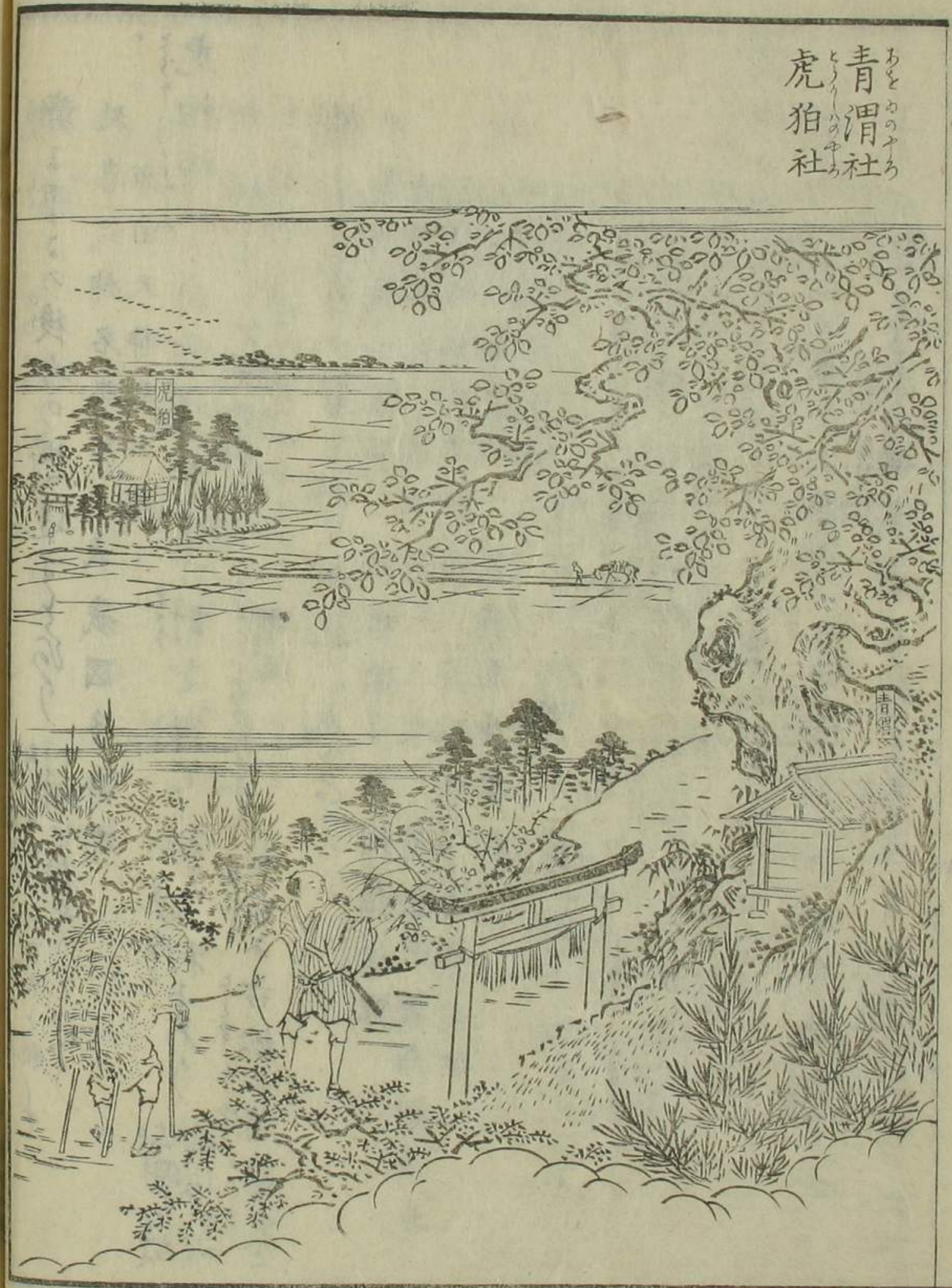
万葉 多麻河泊尔左良須氏豆久利佐良左良尔奈仁  
 曾許能兒乃已許太可奈之伎

家集 自作云云此根の朝露を... 定家

按云万葉集多磨を多麻と作し布田も又古ハ布多と云う往古麻の布を  
 多麻と産せしあり假字ハあれと云ふ意を合はせ麻中を作る者ハ  
 國の府ハ此地より西南なり... 毎國朝廷調布  
 内務寮に納あり然則ハ此國より貢せし處の調布ハ當國は産するもの  
 集めく此川にあり... 國司の係ハ此川にあり  
 依多麻川の水を流す... 水原ハ此川にあり  
 多磨布田より下流ハ漸海に近き... 湖ハ此川にあり  
 あり... 此布田の地... 湖ハ此川にあり  
 三月の頃より七八月... 湖ハ此川にあり  
 其形勢及び唄ひ物の言葉... 湖ハ此川にあり



青渭社  
虎拍社



如来の本佛を安置す作者 赤祥 本堂の向拜の掲る所の虎拍山の

三大字ハ筆者を志す

薬師堂 本堂の前右の方より薬師佛ハ立像御長一尺

そとありて行基大士の彫造なりと云ふ佛龕の内弘法大師の真跡の般若心經を収む

此堂宇二百有餘年と云ふ前迄ハ此地より東南の方三四十

歩を隔て耕田の中ありしなり今古薬師堂と云ふ地也 其頃屢

賊の為ニ佛器の類を棄つれりハ終ニ祇園寺の境内ニ

遷せしなり今薬師堂より一丁程南小薬師堂面と字し一及六畝を

拍江入道旧館地 祇園寺より良の方六七町を隔て二百歩あり

の岡なり空堀の形なり巖然とて残り此地ハ入道崇むる

所の稻荷の小祠あり土人里の稻荷と稱す祠前極の老

樹一株六圍ありありの存せり東鑑は兼元二年戊辰七月十五日

わく武菟國威光寺領内小乱入し田を刈狼藉し及ふ由院主の傍圍海



伯江入道  
旧跡  
祇園寺



訃物とのありを挙ぐり 本柏江の作るハ伯江を誤りたるものありん又云  
 十二月七日二品入落供奉の人名の内ハ駒江平四郎と云ふ者ヲ注す  
 按ニ償日本後代ハ仁明天皇の御時ハ本宿江ハ作るハ伯江を誤れり  
 郷より武蔵國風土記殘編ハ多磨郡の内ハ伯江郷と云ふ地名を記す  
 和名類聚抄ハ同郡の郷名ハ伯江とあり古ノ江と訓すされ此  
 地を今ハ佐須村と稱し駒江の郷の郷記ハ北条根村ハ隣り駒井邑と  
 呼ぶ地あり恐らくハ伯江の郷の郷記ハ北条根村ハ隣り駒井邑と  
 駒井本郷太田新六郎知多の郷の郷記ハ北条根村ハ隣り駒井邑と  
 青渭神社 虎拍神社より北の方深大寺村の中より土人  
 此地を字々天神ヶ谷戸と云ふと祭神詳ならず世々  
 青波天神と云ふ稱せり相傳ふ古ハ社前ハ湖水あり  
 青波の稱ありと社前楓の老樹あり 数百餘霜を經る  
 延喜式神名帳曰 武蔵國多磨郡  
 青渭神社云云  
 按ニ神名帳ハ青渭とあり今本阿遠伊と訓す土人云古當社の前ハ湖  
 水満りてあり故ハ青波の稱ありと云ふ今青波ハ作るハ阿遠葉と訓さるハ  
 櫻ありふ必り從同卷青沼明神の条下と應照て

青渭堤 青渭神社の辺あり古ハ青渭の湖水湛々として後

世邊を切開き水を乾し耕田とありとて故に今此水

彼水六七歩或八十歩ありまゝなる塚のめまゝの残り存して

草樹繁茂せるハ其堤の旧跡ありと云ふ

浮岳山深大寺 昌樂院と号し深大寺邑あり

聖と号せ大古ハ法相宗ありし惠亮和尚以来天台宗に改む

本寺ハ宝冠の阿弥陀如来惠心僧都の作ありと云ふ當寺を

福満童子の宿願ありて天平五年癸酉ハ草創せる此

佛域なり 日本年代記云天平勝宝 四十七代 廢帝御宇

小勅願所と定られしより平城清和兩朝も又勅願所と

なりと云ふ

元三大師堂 本堂の前左に傍てあり寺記云應和四年慈惠大師

和尚と惠心僧都と心をひとつて武藏國深大寺ハ代々の帝勅願の地と

元靈跡より永く此點像を造りて武藏國深大寺ハ代々の帝勅願の地と

年の春ハ別業護摩供を修儀ありし月毎の三日十八日殊に五月

前ハ別業護摩供を修儀ありし月毎の三日十八日殊に五月

降魔尊像 先の靈像と共に春ハ別業護摩供を修儀ありし月毎の三日十八日殊に五月

年中ハ別業護摩供を修儀ありし月毎の三日十八日殊に五月

宮の傍にあり昔此山崖ありて崩れしを起て要石と号し鐘樓

武藏國多東郡深大寺 長四尺三寸 口二尺三寸 雖右

右伏以當山蒲牢開基以來革更其數不一或雖右

鑄有破裂而無聲或雖討得薄畧而三寶垂感諸

數降臨乞願皇風永流佛日彌明成就仍昭銘功

常轉更乞願皇風永流佛日彌明成就仍昭銘功

德其辭曰山名浮岳 新鑄鳧鐘 声形卓犖

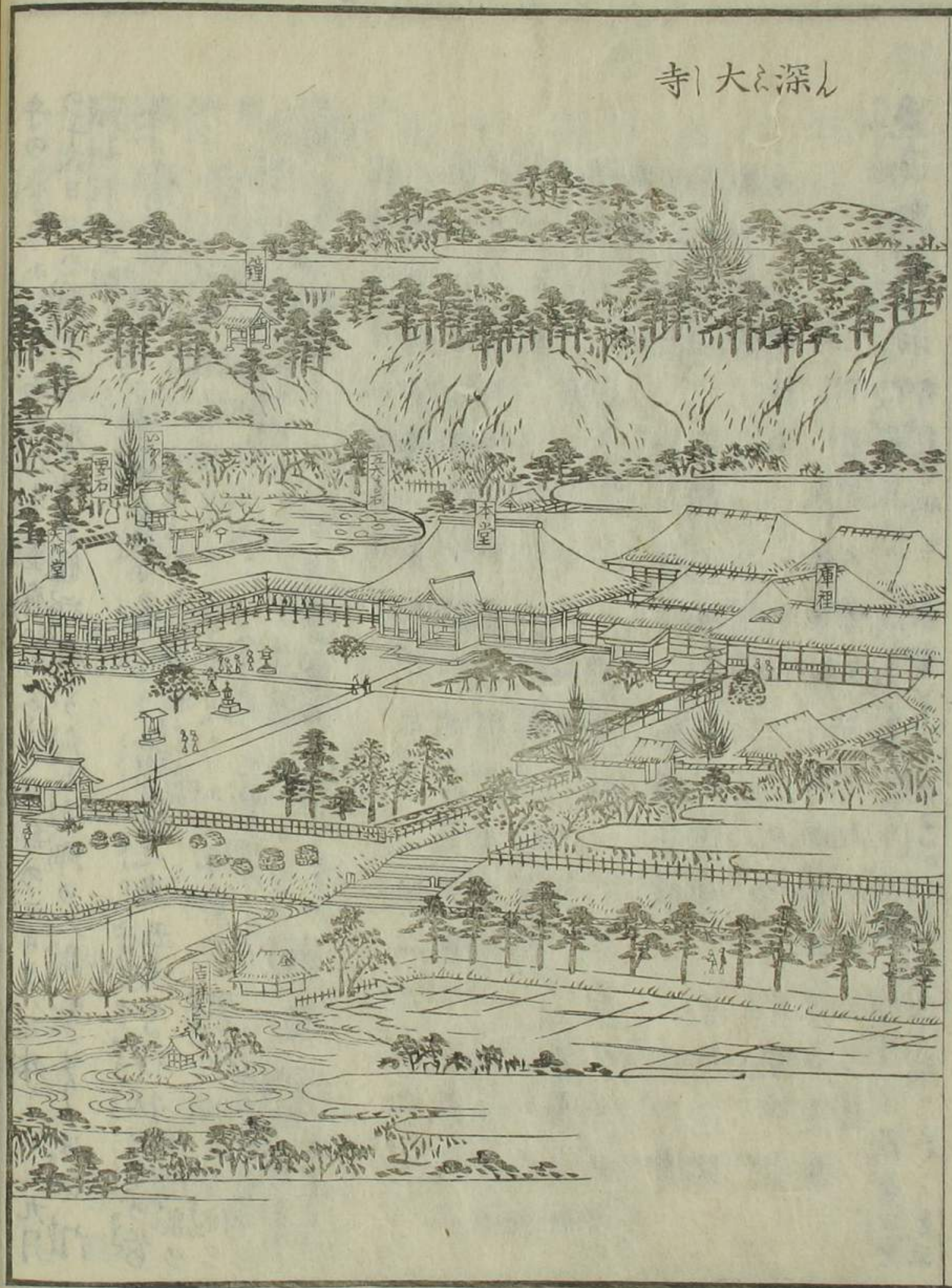
百千深劫 定人正覺 驚起塵夢 消除煩濁

永和二善 丙辰八月十日 大工山城守宗光

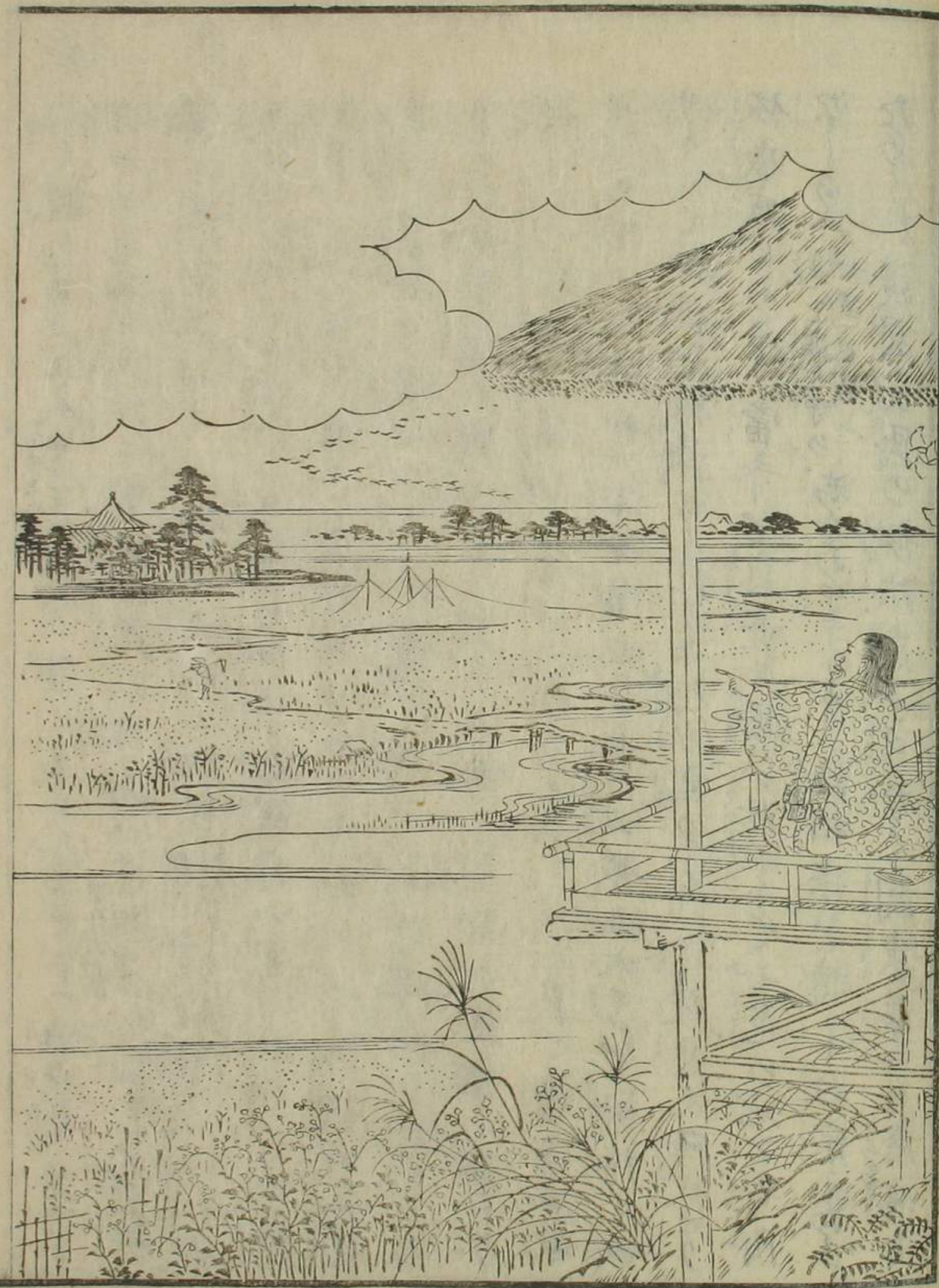
龜島辨財天祠 別當大僧正法印大和尚位守慧運



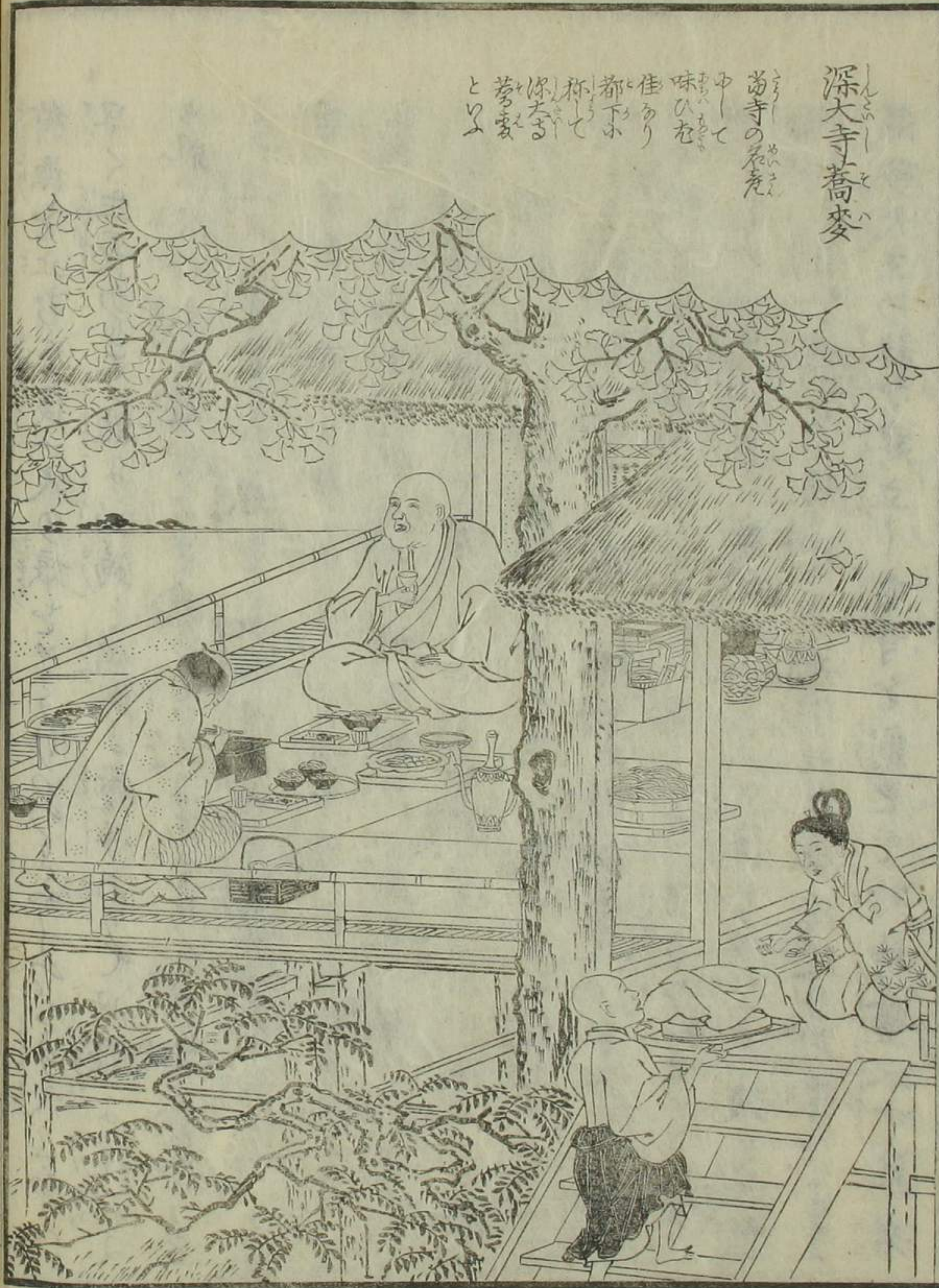
深山大寺







深大寺蕎麥  
 中一  
 味ひを  
 佳あり  
 都下小  
 杯して  
 深大寺  
 蕎麥  
 とよ



上よ現きあみ上人（あまのひと）容を摸（うつ）しとめん（みま）とせしむる衣（き）本（もと）なり  
然（しか）中七月七日玉川（たまがわ）の靈（たま）本の流（なが）れ漂（たふ）れあり則（すなは）是（こゝ）をゆ（へ）く藥（くすり）師（し）  
佛（ぶつ）三（さん）幹（かん）を彫（う）刻（く）し一（いつ）幹（かん）を當（あた）社（しゃ）に納（たく）む（餘二幹ハ下野國日光此由）  
巖（いわ）聞（き）小（こ）達（たつ）しこれ（廢帝の御宇勅願所小定られ浮岳山深）  
大寺（だいじ）と震（あ）翰（かん）を灑（ま）き扁（へん）額（がく）を多（おほ）し又（また）貞（まこと）觀（くわん）年（ねん）間（かん）武（ぶ）藏（ざう）國（こく）司（し）藏（ざう）  
宗（しゆ）卿（けい）叛（はん）逆（ぎやく）と巖（いわ）山の惠（めぐ）亮（りやう）和（わ）尚（しやう）の仰（おほ）せ（乱賊降伏を祈り）  
あみ和尚（わしやう）當（あた）國（こく）の國（こく）分（ぶん）寺（じ）に至（いた）り不（ふ）動（どう）の利（り）刃（じん）を虛（こ）空（くう）に投（な）げ（ひ）  
隕（いん）る石（いし）の勝（か）地（ち）を道（だう）場（じやう）とせしむ誓（ちか）ひあみ（遠小慈）當（あた）寺（じ）井（せい）泉（せん）  
の辺（へ）の石（いし）上（かみ）に隕（いん）ぬ此（こゝ）石（いし）を劔（けん）立（た）の石（いし）と云（い）依（よ）五（ご）大（だい）を（勸清）此（こゝ）  
地（ち）に於（お）て秘（ひ）法（ぽう）を修（しゆ）練（れん）せしれし（力行空）逆（ぎやく）徒（と）悉（しつ）く降（かう）伏（ふく）せり  
依（よ）巖（いわ）感（かん）のあみ（當寺）を惠（めぐ）亮（りやう）に賜（たま）ひ此（こゝ）而（こゝ）て七（しち）邑（い）の地（ち）を寄（よ）附（ぶ）  
な（あ）み（是を深大寺の）あ（あ）み（七邑と唱ふ）あ（あ）み（より）法（ぽう）相（しやう）宗（しゆ）を傳（た）し台（たい）宗（しゆ）のあ（あ）  
たれこれ護（ご）國（こく）安（あん）民（みん）の秘（ひ）法（ぽう）怠（たい）る（り）なく（關東第一の密場と）

な（あ）み（昔ハ十二宇の塔頭ありて大伽藍ありし）後（ご）野（や）火（か）の災（さい）に罹（ら）  
る（あ）み（度ミの兵火）今（いま）昔（むかし）の遺（い）り（後野火の災に罹）  
る（あ）み（）灰（はい）燼（じん）とありしと世（よ）田（で）谷（や）の吉（きち）良（ら）家（け）深（ふか）く（信）信（しん）し（）再（また）ひ  
堂（だう）宇（う）を營（えい）む波（な）平（へい）行（かう）安（あん）の刀（た）を寄（よ）附（ぶ）す（無銘長四尺五寸あり）  
繪（え）卷（まき）物（もの）并（なら）詞（し）書（しよ）二（に）卷（まき）參（さん）議（ぎ）右（みぎ）中（な）將（しやう）藤（とう）原（げん）公（こう）尹（いん）卿（けい）筆（ひつ）  
抑（おさ）當（あた）寺（じ）ハ（關東）融（じゆ）通（とう）念（ねん）佛（ぶつ）最（さい）初（しゆ）弘（かう）通（とう）の道（だう）場（じやう）中（な）慈（じ）眼（がん）  
大（だい）師（し）大（だい）猷（い）公（こう）の（上）聞（き）小（こ）達（たつ）し（融）通（とう）念（ねん）佛（ぶつ）百（ひやく）遍（べん）を  
受（う）とせ賜（たま）ひ忝（かたじけ）も結（むす）縁（縁）の名（な）帳（ちやう）小（こ）御（ご）諱（ご）を記（し）させあ（あ）ひ（）  
當（あた）寺（じ）融（じゆ）通（とう）念（ねん）佛（ぶつ）の縁（縁）起（おこ）し（詳）詳（しやう）なり（此念佛ハ大原の良忍上人現）  
此（こゝ）法（ぽう）や或（ある）ハ（十）返（へん）乃（な）至（いた）千（せん）返（へん）乃（な）日（に）課（か）と（我）唱（な）る（）の稱（しょう）名（な）の功（こう）徳（とく）と  
此（こゝ）の人の名（な）と他の人の唱（な）る功（こう）徳（とく）廣（ひろ）大（だい）無（む）辺（へん）と（自）自（じ）らの為（ため）と（互）互（ご）に融（じゆ）通（とう）し（）自（じ）他（た）  
平（へい）等（とう）の修（しゆ）念（ねん）の徳（とく）功（こう）徳（とく）廣（ひろ）大（だい）無（む）辺（へん）と（自）自（じ）らの為（ため）と（互）互（ご）に融（じゆ）通（とう）し（）自（じ）他（た）  
天（てん）至（いた）此（こゝ）の念（ねん）の徳（とく）功（こう）徳（とく）廣（ひろ）大（だい）無（む）辺（へん）と（自）自（じ）らの為（ため）と（互）互（ご）に融（じゆ）通（とう）し（）自（じ）他（た）  
深（ふか）大（だい）寺（じ）蕎（せう）麥（ま）當（あた）寺（じ）の各（かく）産（さん）と（）題（だい）を産（う）む（地）裏（ら）の（前）前（ま）に（）佳（よ）品（ひん）と（）然（しか）れ（）  
真（ま）と（）甚（しん）火（か）今（いま）近（ちか）隣（りん）の村（むら）里（り）より産（う）ま（る）る（）の（）あ（）と（）此（こゝ）名（な）を冠（かん）す（）  
難（なん）波（な）田（でん）彈（だん）正（せい）城（じやう）址（し）深（ふか）大（だい）寺（じ）大（だい）門（もん）松（しょう）列（れつ）樹（じゆ）の東（ひがし）の方（かた）の岡（おか）を云（い）土（つ）人（にん）を

城山と呼ぶ今ハ麥畑とあるところ此所彼所ハ湍池の形  
残り此地ハ往古 清和帝の御宇藏宗卿武藏國司  
より一時こ住せられより旧館の跡や天文の頃上杉  
朝定の家臣難波田彈正忠廣宗松山の城の出張として小  
城廓を構へり

北條五代記曰く上杉修理大夫朝興の嫡男五郎朝定生年十三歳ありて家を  
継武州深大寺とつる古城を再興し北條氏綱目向ひ引矢の企むる  
とつる茶下小七陣廿日ありこれたけし中ひやとありその田の  
難波田ありてつるを松山とて難波と北條於小山中に據り  
よせ一首ハかくて

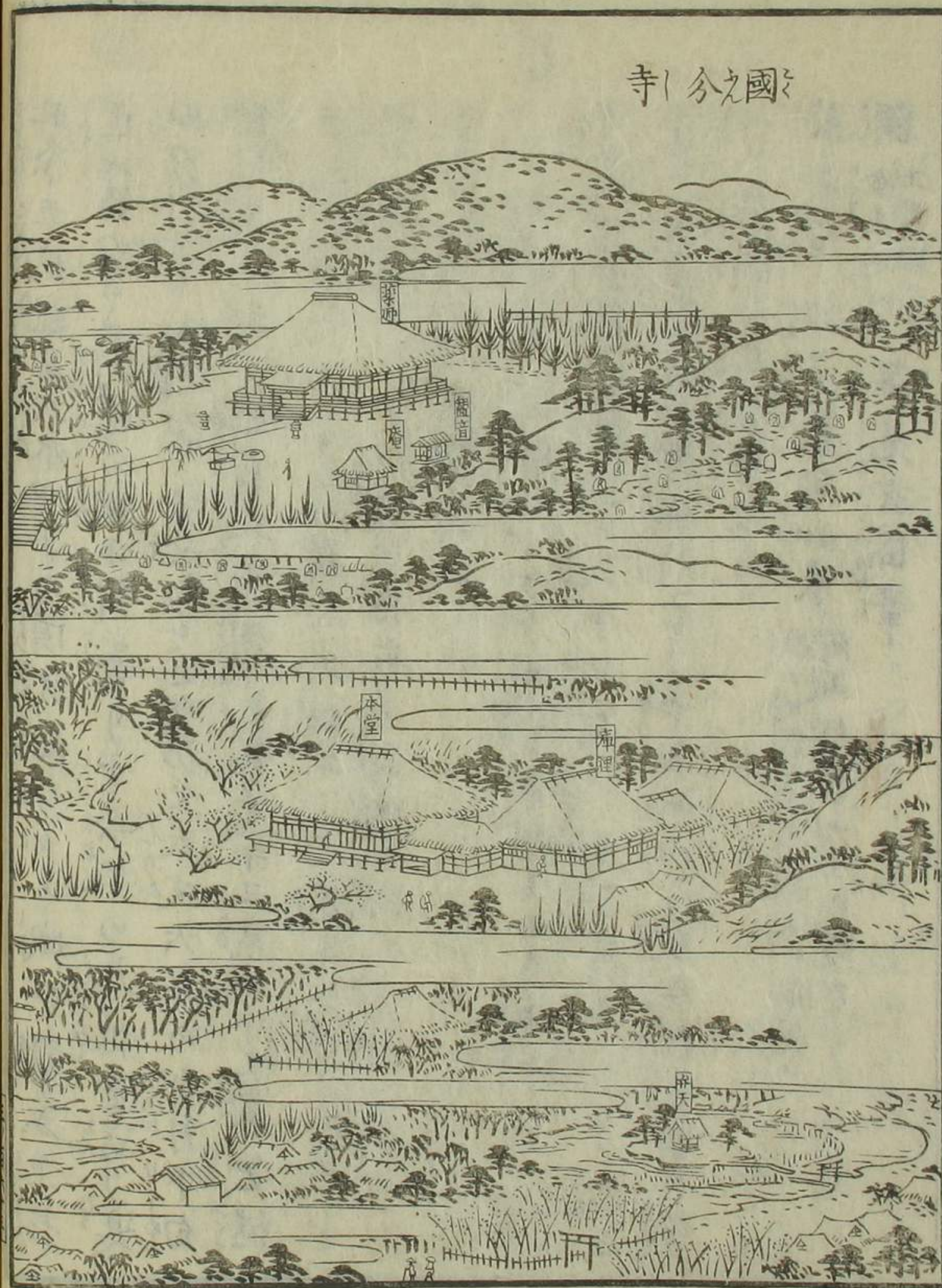
深大寺城跡 深大寺佛堂の後の方の山嶺やぐら間六七丁と  
隔り空堀或ハ柵門杯ありと覺りて形今猶嚴然と

北條五代記ハ大永四年の頃氏綱江戸の城を襲ふ上杉  
直作ハつる河越の城ハ引籠り十余年の春秋を送り迎へ  
ぬつより例ありす心ちをひて天文六年の卯月下旬  
世を早く去る嫡男五郎朝定生年十三歳やぐら家を継  
あひぬてのれハ七ヶ月日の服忌入徑をく道をあつて兵を  
起し深大寺とつる古城を再興し氏綱へ向て弓矢の企むる  
かりとあるハ則此和のゆかり

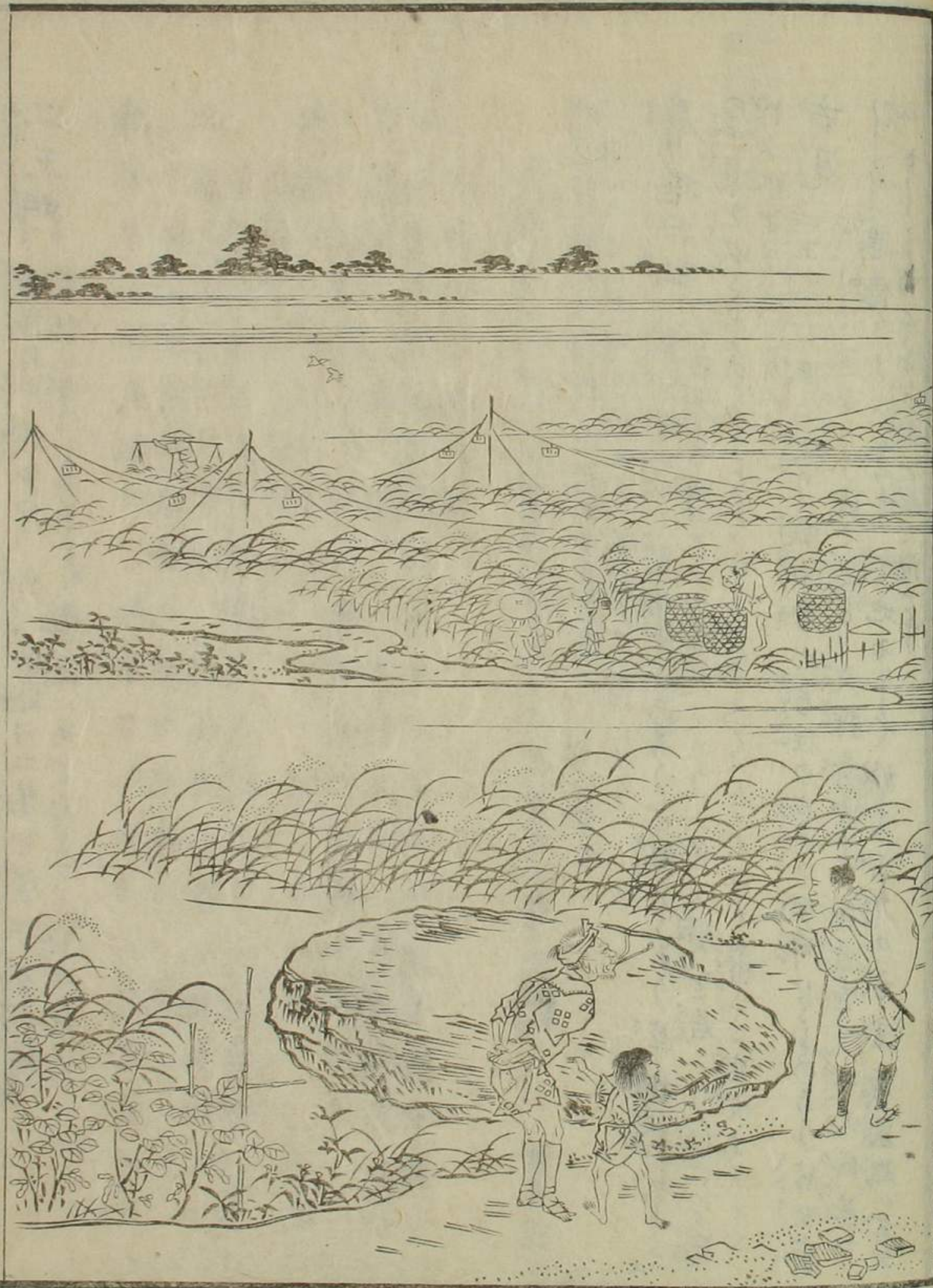
醫王山國分寺 最勝院と号國分寺村あり府中あり北の  
方十八町と隔り當寺ハ天平年間行基菩薩草創とす  
しハ聖武天王の勅願所なり中興阿闍梨と号  
今ハ新義の真言宗なり  
藥師堂 本多藥師如来 阿闍梨行基大士の作なり  
額 王護國之寺 深見玄岱筆



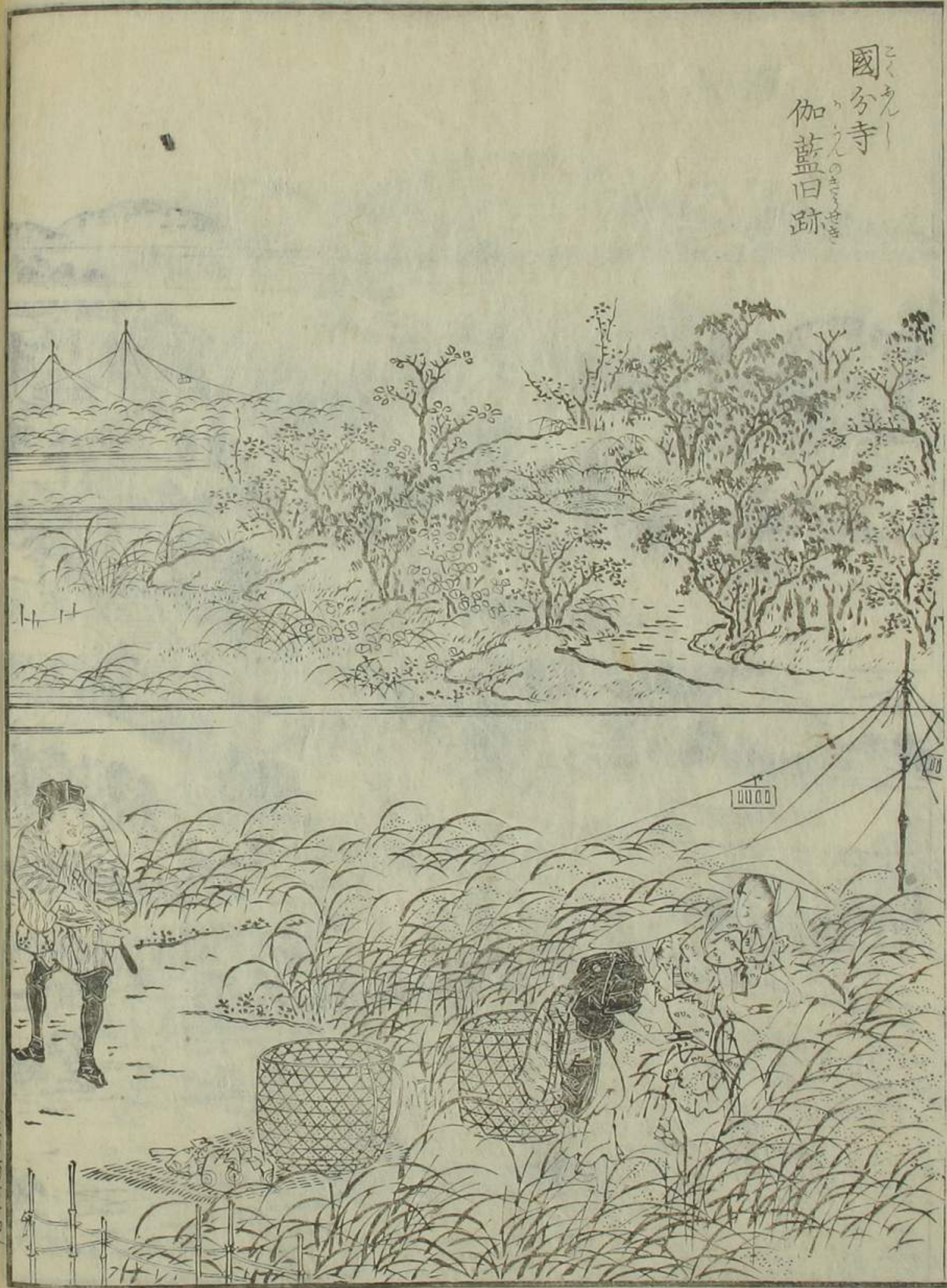
寺分之國

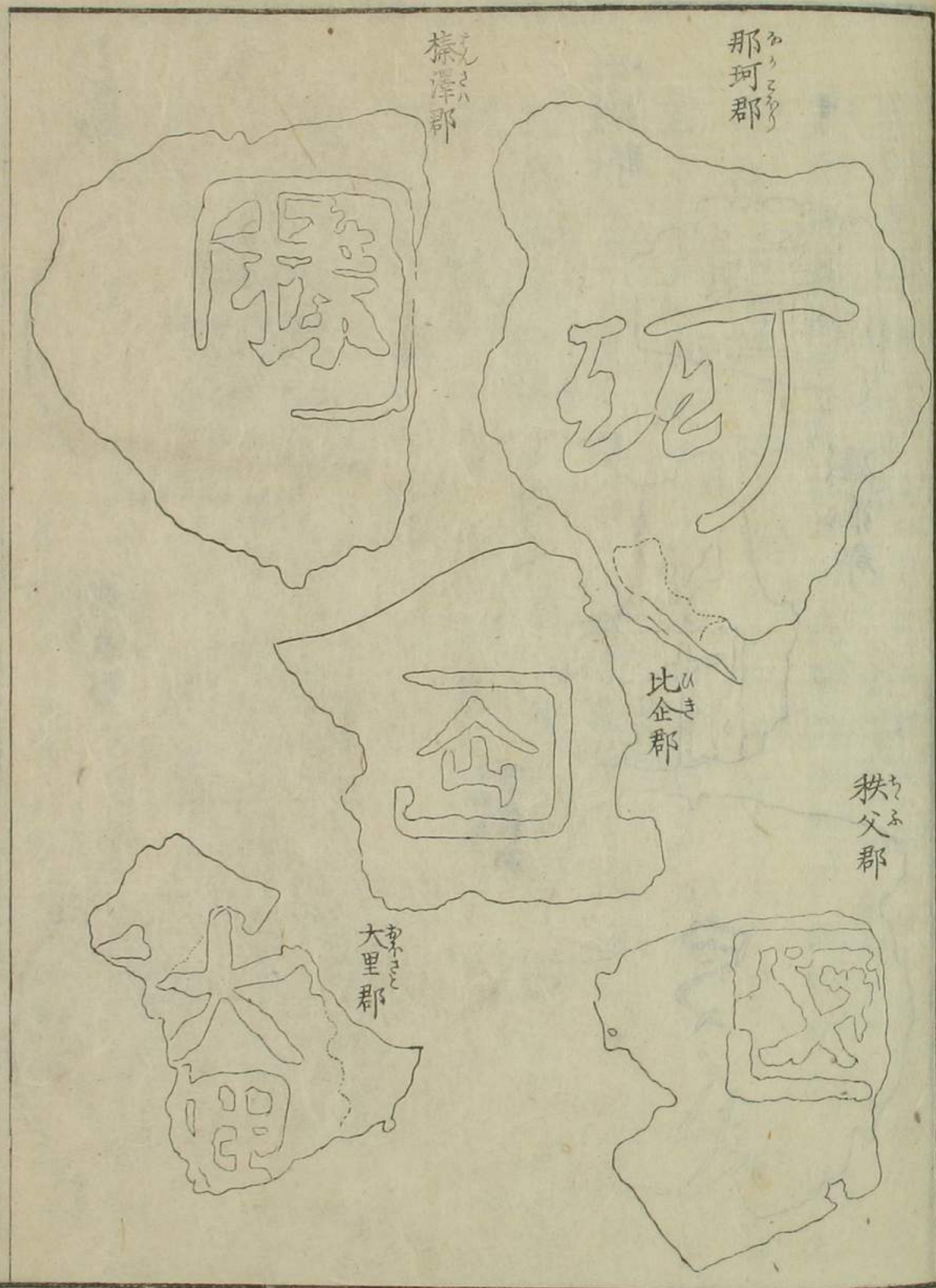






國分寺  
伽藍跡





二王門

石階の中腹あり金剛密迹の二像を置作者未詳  
堂林ハ古のこゝに舊地ハ半丁あり南あり

續日本紀聖武紀曰金光明寺法華寺十一月己卯詔天  
下諸國別令造日  
喜式弟二料五六卷  
東國分寺七料五萬  
王料七十料五萬  
鑑曰建久五年東云藥師寺料四萬二千東梵釋四  
一宮并國分寺可修復十一月二十七日云云  
書曰寬喜三年王經之由被仰下開東御分國々  
分寺可轉讀云云  
行然奉行云云

たのこゝに世を分て寺の殿々 称名院

二王門跡

寺前半町ありを隔ち南の方の  
細の中ハ礎石を存せり

層塔跡

國分寺の北東南半丁ありを隔ちあり草梅繁茂  
のの中真を收るありと云々中み徑三丈と云々石中置る空穴あり

内水

二王門跡の辺り數百歩あり往の古瓦の破砕せしものあり皆堅密  
古瓦の形全くと云々文殊奇中と云々國分寺の古大伽藍

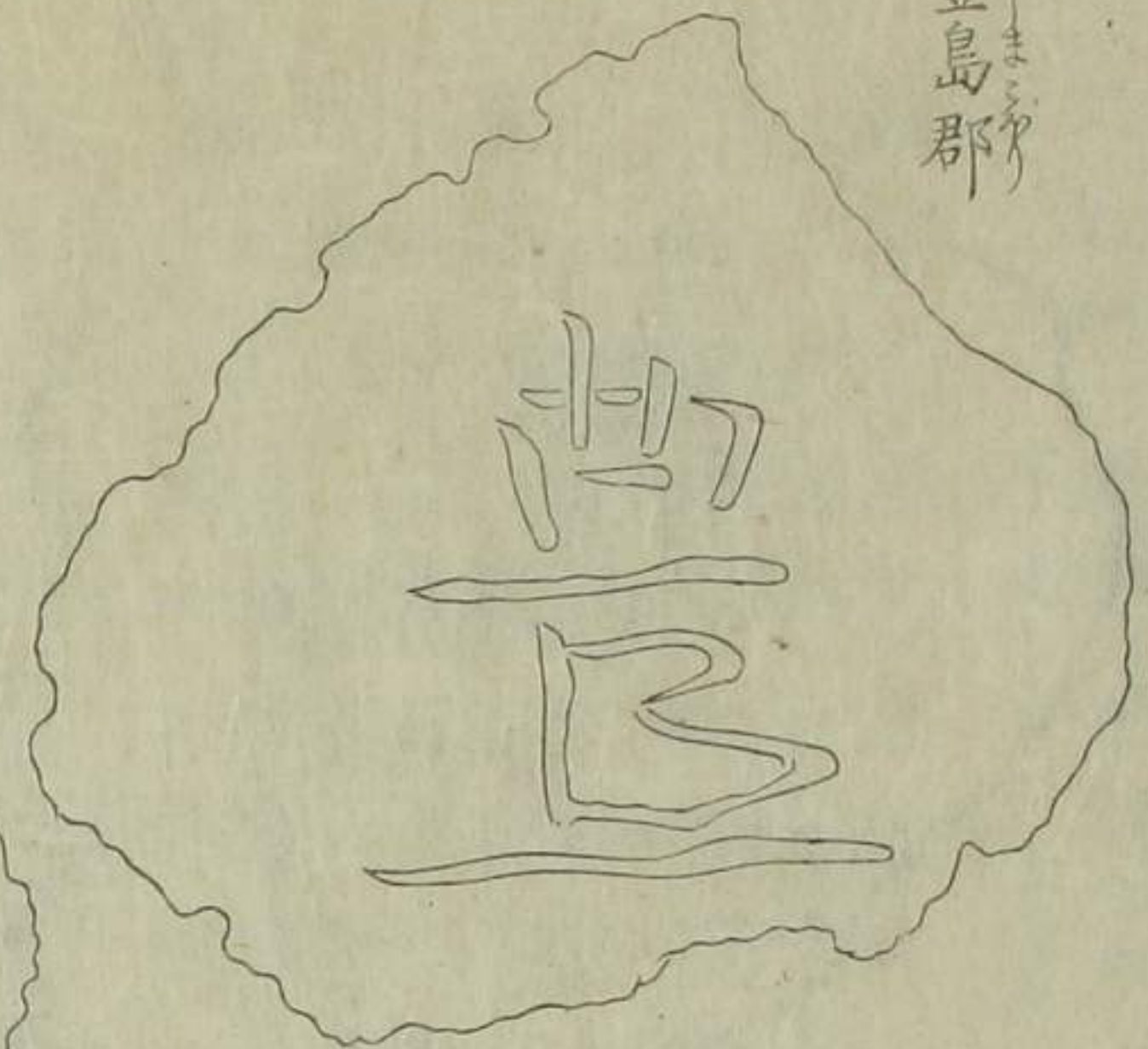
古瓦

想像の形全くと云々文殊奇中と云々國分寺の古大伽藍

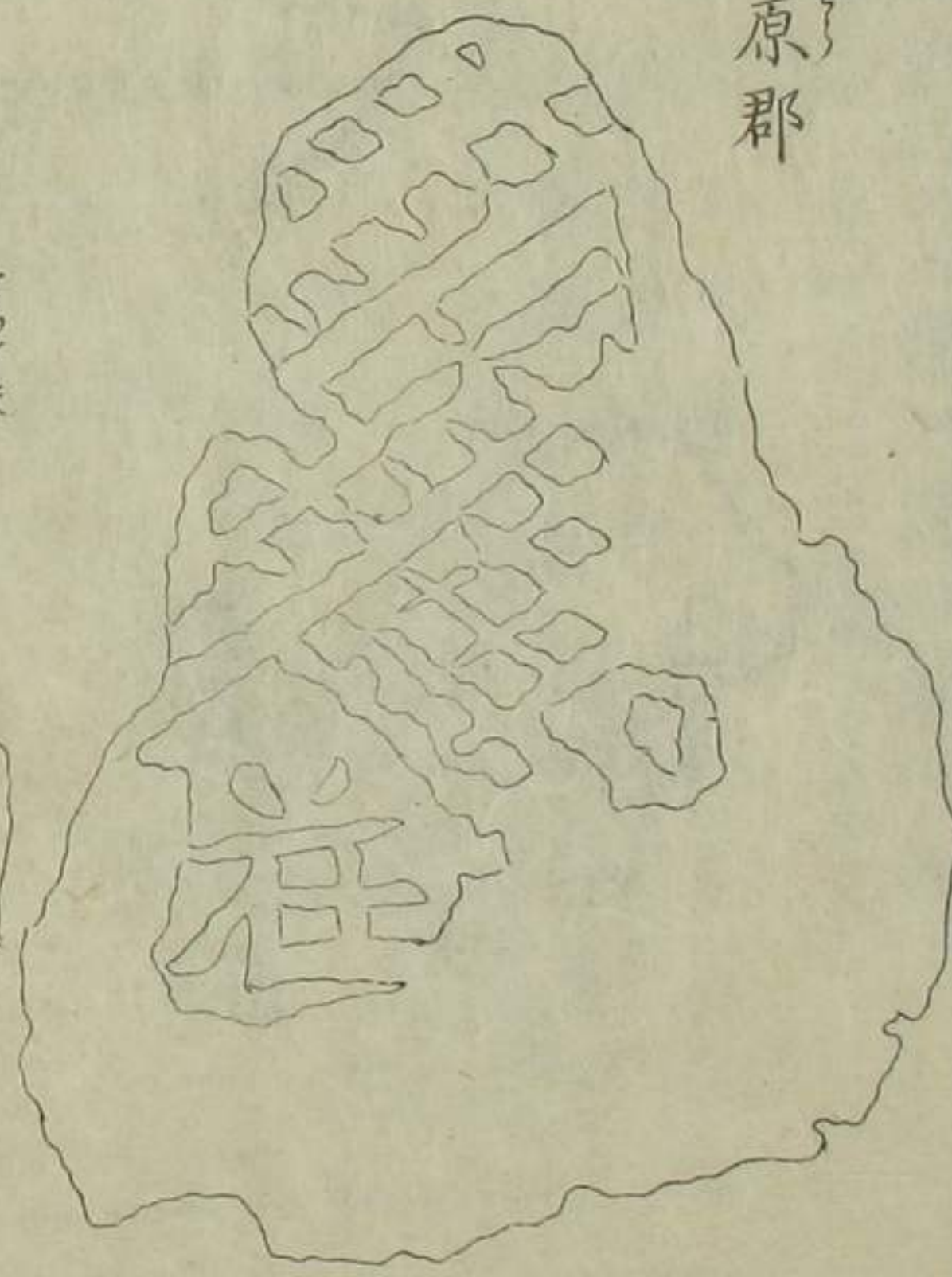
印せしものこゝ其形を辨て證す

豊島郡

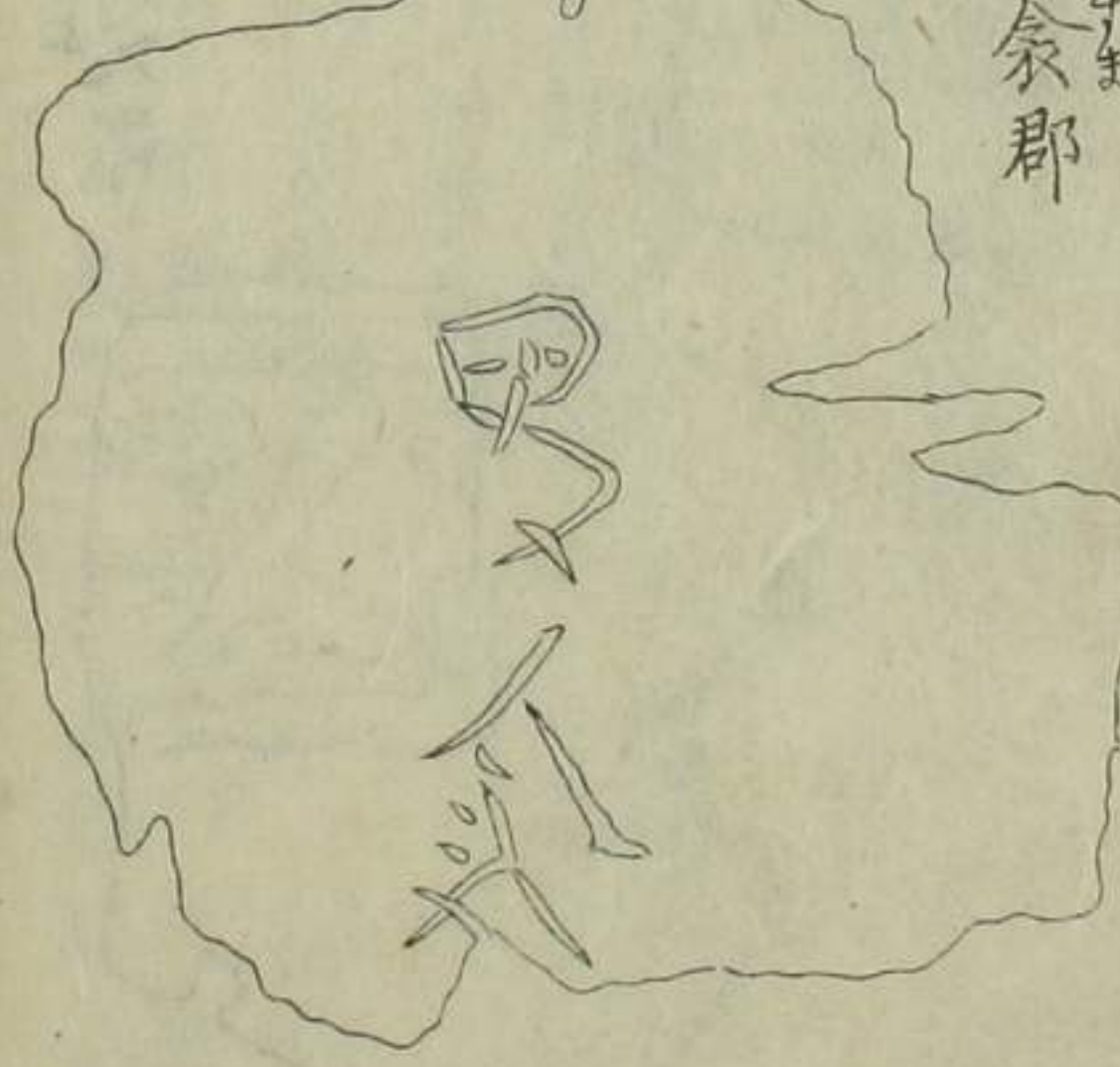
埼玉郡



荏原郡



男衾郡



幡羅郡



國分寺碑

藥師堂の前右の方より當寺碑法印賢盛建ふなり

當寺往古源賴義朝臣同義家朝臣與州征伐發向の頃と

當時へ入りし頃ハ盛大の寺院なり云ありこの星霜を

徑々元弘の兵火に亡びしを新田家少々再興ありし兵革の

世終に古は復せり然るに宝曆年間権大僧都法印

賢盛衆像を募り新に醫王閣を宮建し侍る所の霊像を

安んず靈跡を表す今古伽藍の礎石の嚴然とて田間

阡陌の間は埋もれ懐旧の情を催せり此寺前畑の中わづら

あり或人云わづらに食わすけ場ハ頭掛場ありと依り按て古ハ合戦の

處敵方の首級を掛し地をばハ傍に食わす住居ありしありし歟

富士見塚 國分寺より西の方五町を隔つ此所小登れハ一瞬千

里殊に奇觀なり東ハ浩茫とて限るなく天涯のうら小地

接しと見ると中秋の夕月のあつきを草よりわき草小入の

古詠も古を想像し感情少くす此故に幽人騷客も来り

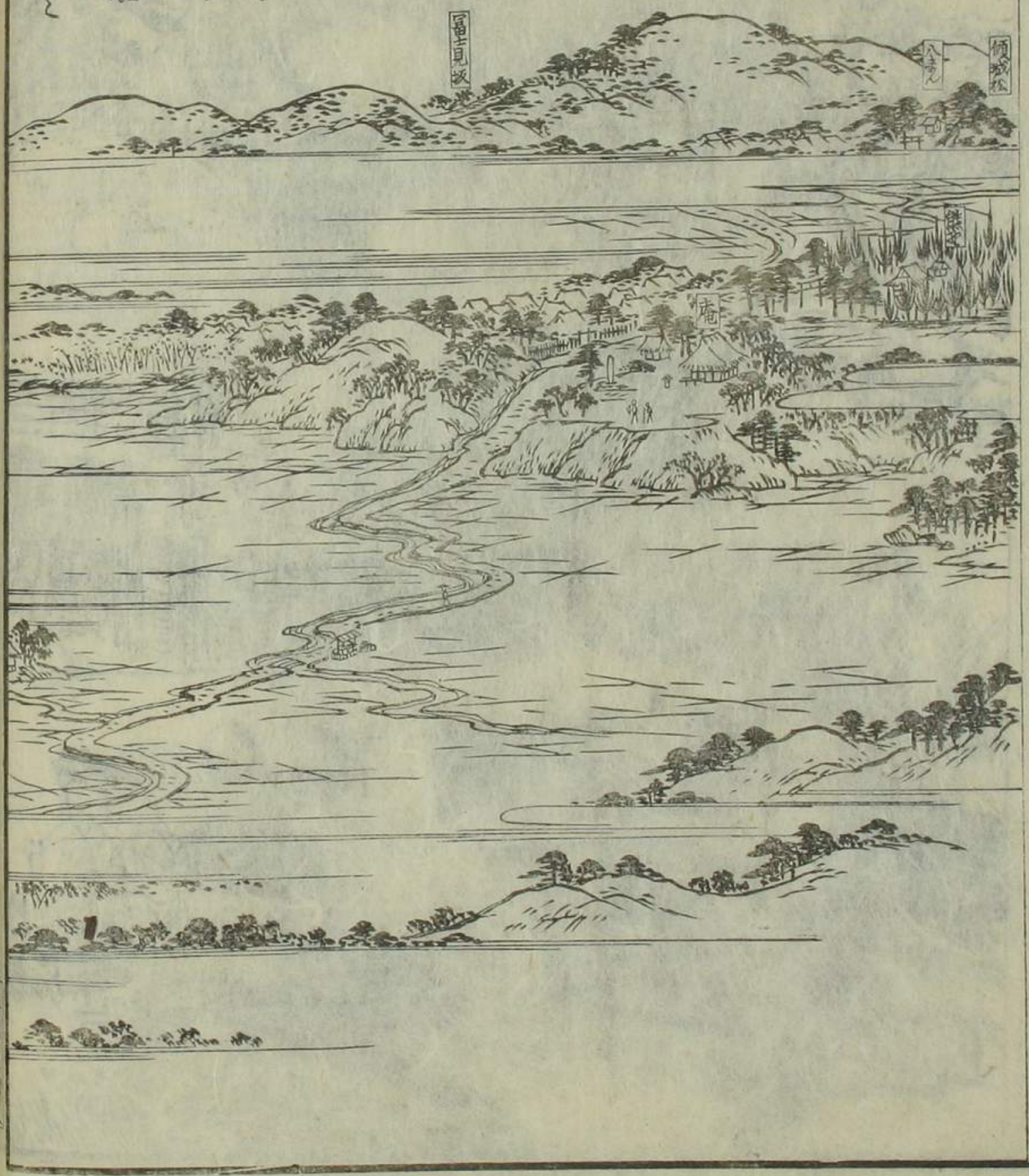


國分寺村  
炭かほ

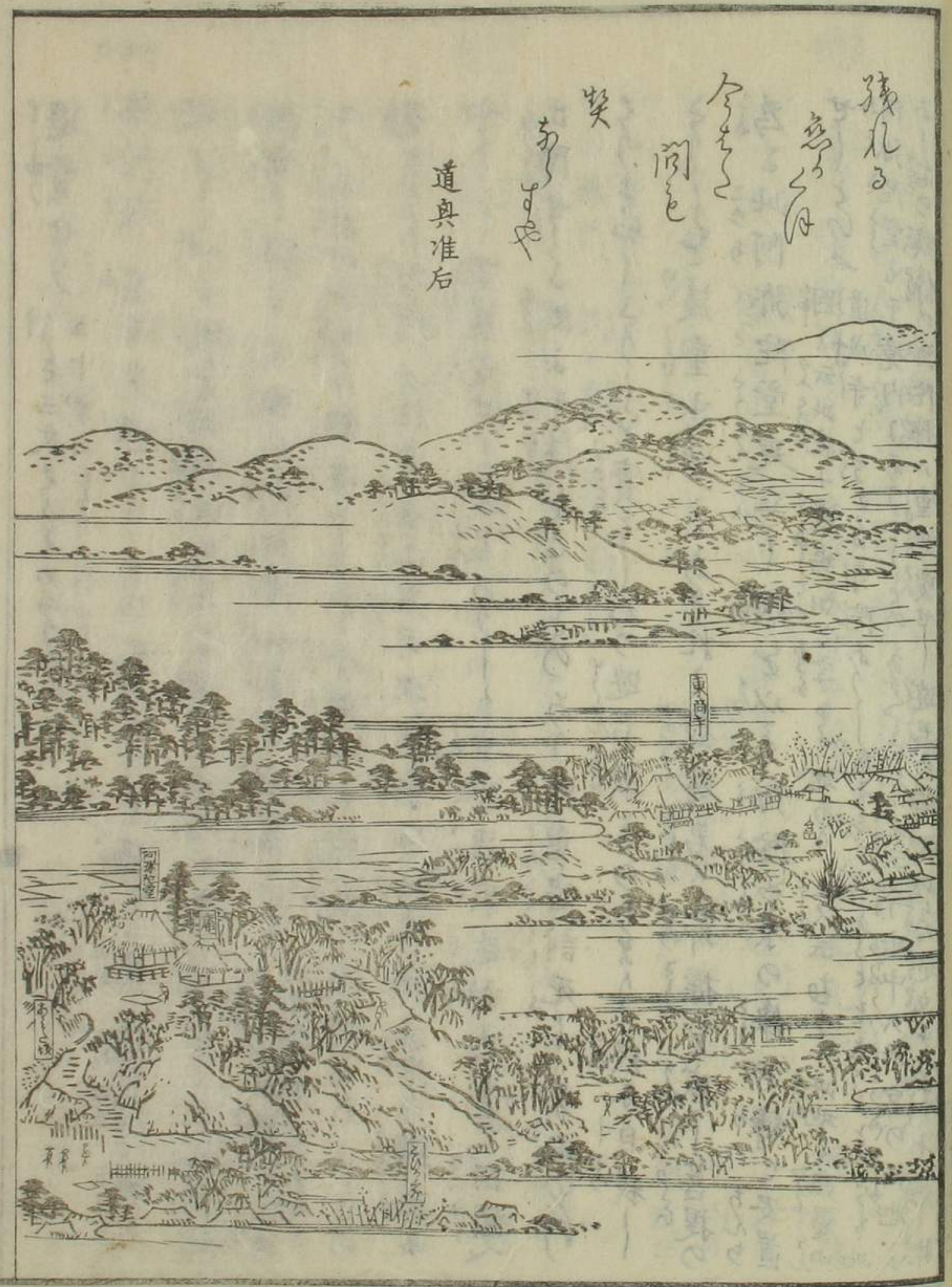


意ヶ窪  
 阿弥陀堂  
 傾城松  
 牛頭天王

回國雜記  
 朽木と  
 名の



残れる  
 今も  
 関也  
 道真准后



遊賞せり五十歩ありたり

阿弥陀坂 富士見塚より十三町ありを隔て意々窪村の地北へ

向ひく下坂を云此坂の左は傍々岡小草庵あり土人阿弥

陀堂と稱す木像の阿弥陀如来を奉るとす延享四年鶴心と云僧此草庵の廢とを興す

土人云古のかまの銅像ゆゑ今府中六所宮の社地はあるとの

見なりとお傳へ往古畠山庄司次郎重忠此地意々窪の驛舎小

中々一頃寵愛せし遊君ありし重忠平家追討つとて西國へ

出陣せし然も其後をこのものありて重忠討死しと由り

たりまかしとて實とてかの遊君歎そのあまり終小自殺し

たりしを後重忠さくあをれと彼遊君う節操を感し菩提の

為に此阿弥陀堂建立し鏡を以て弥陀如来の像を鑄て安置

せしとて因云此地小道場畑と字あり土人云むく此地は無量山

阿弥陀堂も境内あり寺あり又云今府中六所宮の社地は

ありて佛の鏡像の弥陀佛ハ重忠愛せし遊君の菩提の爲に造立せしと云

意々窪 同所坂より下の低地をのり古へ東奥北越ホの國あり

京師及び鎌倉へ至るの驛路あり重忠の遊女の家居なる

ありていとあまのりたり

旧址ありと云り

回國雜記 意々窪と云るあり

朽木とぬまの地も意々窪今をこもちあり

傾城松 同所良の方八幡宮の社地あり同一程の古松二株

雙立せり土人重忠を愛せし遊君の塚印の松ありといはれ

然れども社地なるもの此八幡宮の神樹あり

武蔵野 南ハ多磨川北ハ荒川東ハ隅田川西ハ大嶽秩父根を

限とて多磨橋樹都筑荏原豊島足立新座高麗比企入間

等まじり十郡は跨る草より出て草入又草の枕は旅寝此

日敷を忘れ向へし里の遙なり杯代々の歌人袂をさゆり

御入國の頃より昔引之十萬戸の炊煙紫霞と暮らふ棚引  
僅よ平田跡の残るも兼應より享保に至り四度迄新田  
開闢ありて耕田林園とあり往古の風光これありとされと月夜  
狭山小登りて四隣を顧望もるるに江を曠野蒼茫千里無限  
往古の状を想像もるるなり  
狭山八第四巻  
の中へ入る

萬葉十四東歌

武藏野爾宇良敵可多也伎麻左氏爾毛乃良奴伎  
美我名宇良爾低爾家里  
武藏野乃乎具奇我吉藝志多知和可禮伊爾之與  
比欲利世呂爾安波奈布與  
古非思家波素氏毛布良武乎牟射志野乃宇家良  
我波奈乃伊呂爾豆奈由米  
伊可爾思氏古非波可伊毛爾武藏野乃宇家良我

波奈乃伊呂爾低受安良牟  
武藏野乃久佐波母呂武吉可毛可久母伎美我麻  
爾末爾吾者余利爾思乎  
和我世故乎安行可母伊波武牟射志野乃宇家良  
我波奈乃登吉奈伎母能乎

新古今

仍亦を度ふひとの武藏野なるものありてゆる月くを

撰成  
大政大臣

續古今

むさしは月の入るさしを屋敷り未ふかゝるふを

通方

玉葉

旅人のゆくゆくふをさしけくをありてゆるむさしとの糸

右大臣

續千載

むさし地はねむりも秋萩のむらさきありありあり

おん入

續後拾遺

むさしまさこころふはむさしむさしむさしのむさし下ふ

家隆

新續古今

むさしのゆくゆくのもむさしむさしむさしの糸

定家

十五番奇合

むさしむさしむさしむさしむさしむさしむさしむさし

雅経

夫木 花のまゝ我も一妻これかん一由業のむき一の家 為實

回國雜記 むき一のゆくは月をさうめく

ひきき 一のゆくは月のこはけり野、の郎

桂林集 むき一に長陣せし時をききしをばきく 直朝

むき一のハ本流もそそひ時を歳日をもたふ小唄ん

武蔵野記行

武蔵野記行 武蔵野の古奇ハ萬葉集をむき一とて代々の撰集を餘奇合むけり  
の集むとあまのむき一とて枚舉まのまあむたせふ取られしもの其  
酔く切とを記しとす

むき一とてつとをささくか入ん移るま果あられハ 氏康

むき一とてつとをささくか入ん移るま果あられハ 氏康

むき一とてつとをささくか入ん移るま果あられハ 氏康

武蔵野の古奇ハ萬葉集をむき一とて代々の撰集を餘奇合むけり

の集むとあまのむき一とて枚舉まのまあむたせふ取られしもの其  
酔く切とを記しとす

武蔵野翁 翁ハ其郷姓話らすた 郁芳門院の一萬士と

云院崩まのの後齡二十九や、世を避て諸國を遊歴

此小止る菴を結び月小卧、武蔵野の廣を愛を六十年を

經く西の法師ハ邂逅を一宿を授、通宵古を淡、淡を

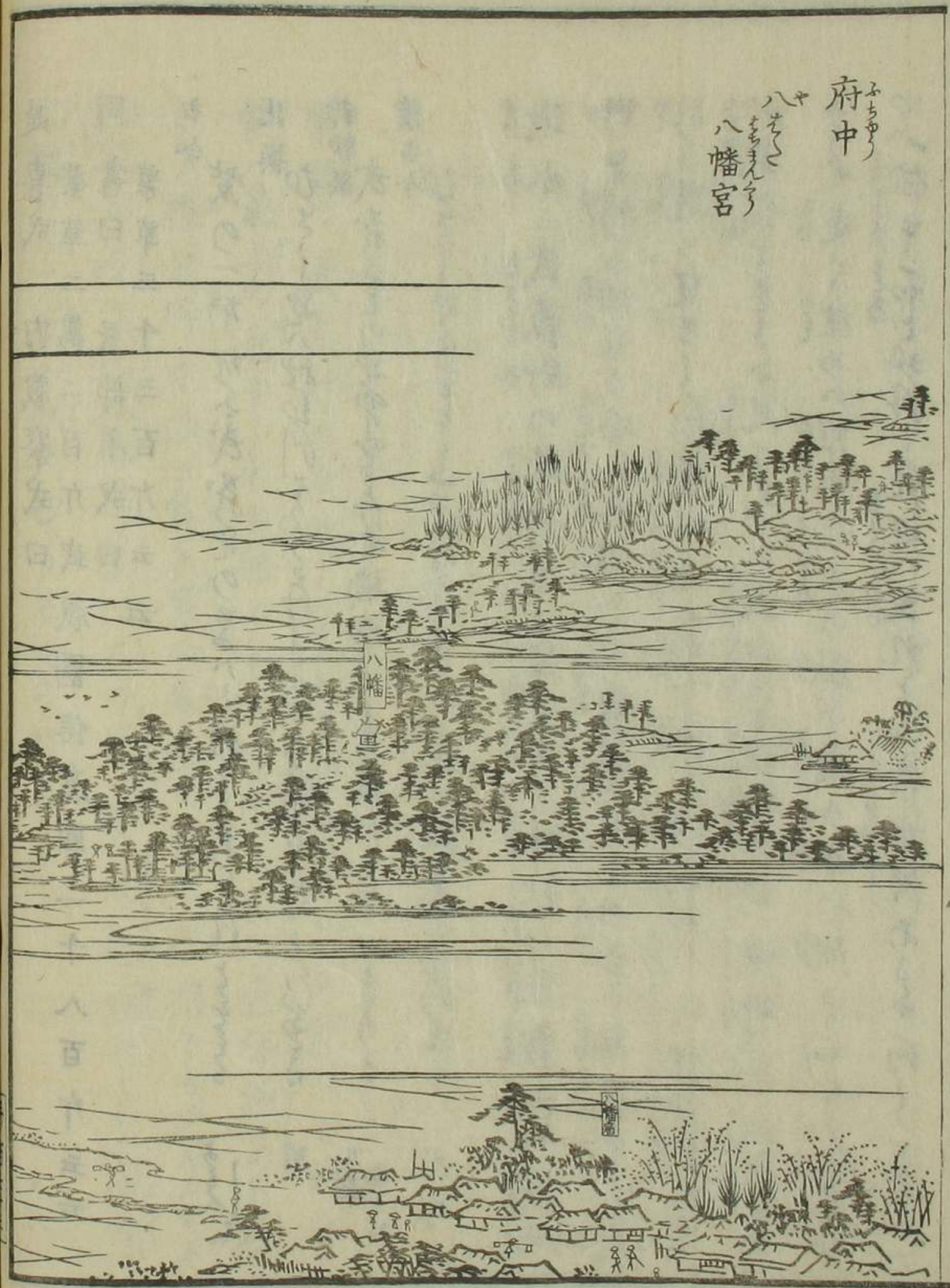
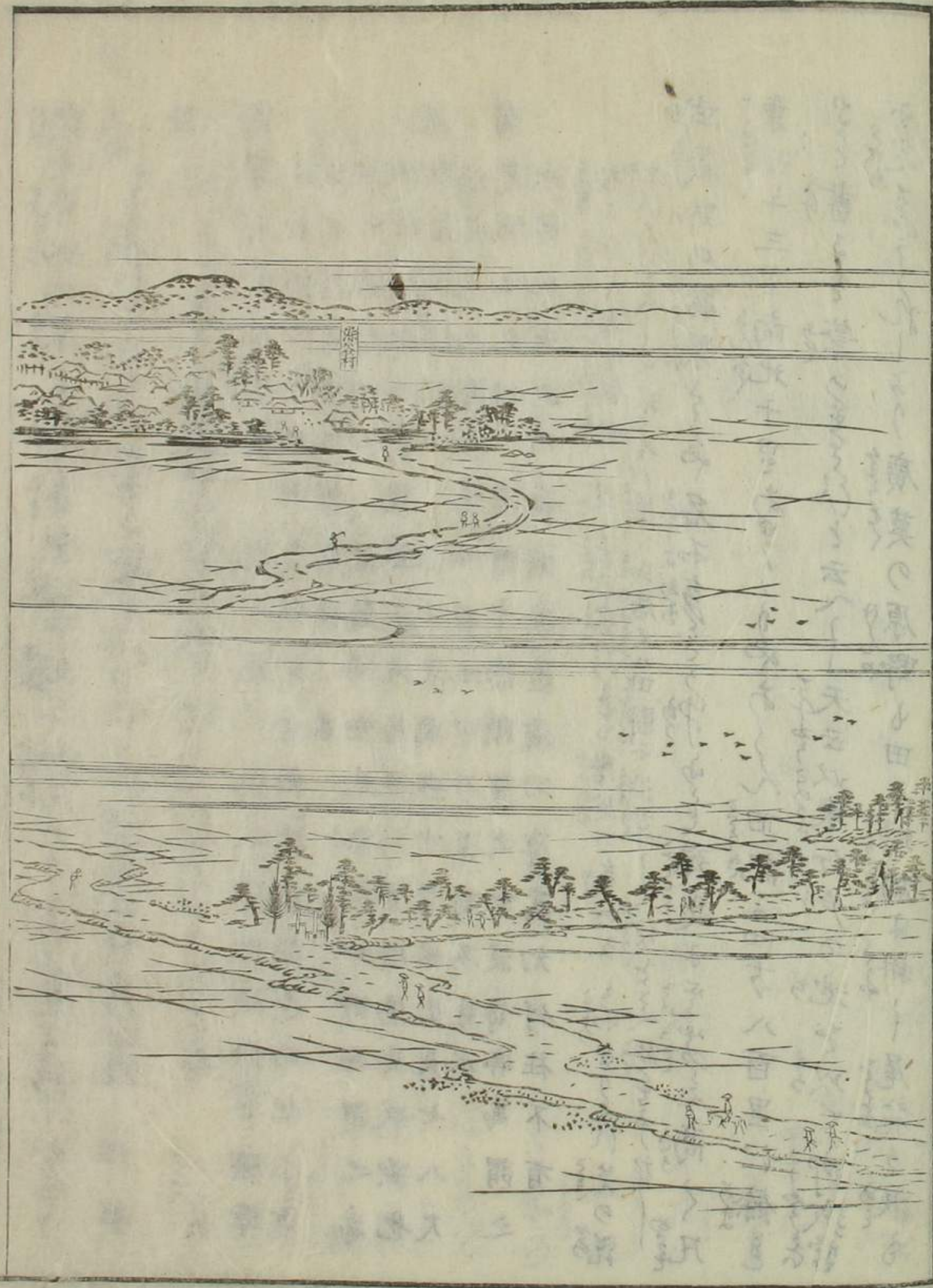
緇衲ハ濶く曉小追て別、債杖柔隠逸傳

西行物語

西行物語 ささくつとをささくか入ん移るま果あられハ 氏康







終小水の原に至るを極ふ此名ありといふをよほしかき

夫木 東海ありといふある迹を此のけうれをもをよほし 俊頼

同 おとしけのまをたれは水の迹をありとをよほし

性靈集詠陽燄喻 運々春日風光動陽燄紛々曠野

飛舉體空々無所 有狂兒迷渴遂忘歸遠而似水近

無物走馬流川何 處依下畧見熱氣如野馬謂之為

運故註智論曰轉 飢渴問極流川皆謂陽炎狀也

唐陸勳志怪錄曰 近轉滅走鹿縣中有水影長七八尺

陸望見人馬往來 如深州東鹿縣中前不見水謂之

周處風土記曰往 氣野中陽燄回薄變幻何往不有

水影此天地之氣 網溫盪滴薄變幻何往不有

武藏野の勝聚々々名不劣さうゆめと珠更よすやのえ高く凡

東西十三里南北十里ありりやあ〜ん旧記は四方八百里に餘る

る書る筆のま〜ひと云へ〜天正以來江戸の地を以て御城宮

小定ま〜れ〜あり廣莫の原野も田は鋤畑は耕〜尾花う浪も

民家林藪小沿草〜て万々一を殘せるのみ

新田開墾ふより下宿と〜地の傍は原野の形勢を殘さ〜大野と野

八幡宮 府中六所宮の末社中〜甲州街道八幡宿の道より左ふ

あり祭々應神天皇なり六所宮の神主兼渡氏兼帝奉祀

す相傳 聖武天皇の御宇日域の國は勸精一宮宮も〜の

この皆是八幡村の八幡宮とのみ多々ハ總社神祠の近さあり

當社も古ハ本社禮殿並ひ建々莊嚴蕩々〜り平後々

衰敝は速ひ今ハ即茅宮小社なり 早年あり前ま〜ハ老杉一株

暴風吹か〜今ハ明和年配の又社境圍園の中は權ノ正とのみ

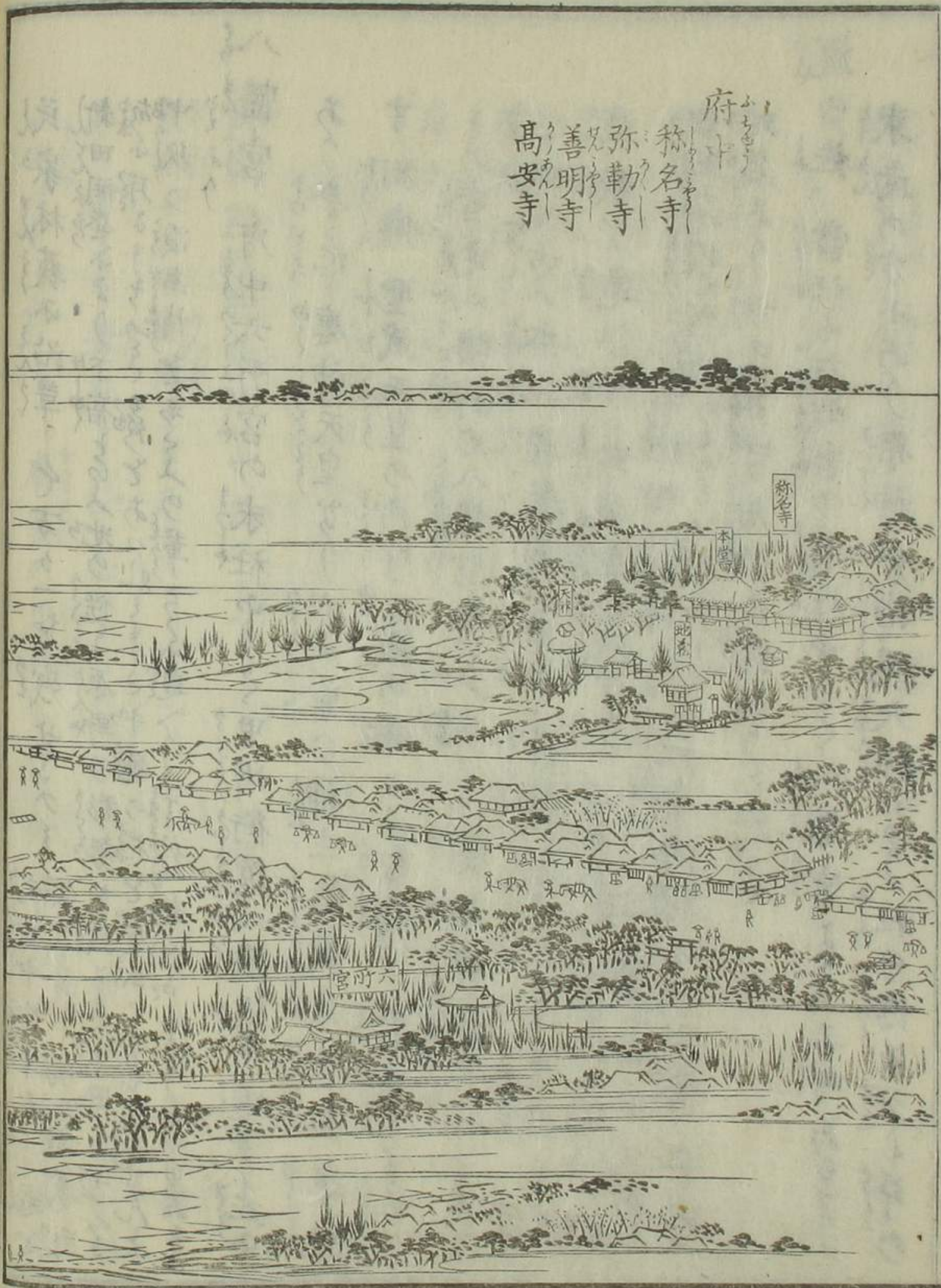
地名あり古の宮守居住の跡ありといふ

瀧の社 當社も六所宮の末社中〜ハ幡宮より三町ありり

東南の方ふあり祭神倉稻魂大神なり社の傍は少〜斗の



府中  
稱名寺  
彌勒寺  
善明寺  
高安寺



飛泉あり六所宮の御手洗池と称せ毎年五月五日大祭の時  
神幸供奉の輩ハ五月朔日より此龍に浸りて身を清め神夏小  
たつさつと云

石塚社 當社も又六所宮の末社中へ同所南の方代小川の辺に

あり祭神磐筒男命磐筒女命二座なり

府中驛舎 甲州街道の官驛中へ江戸日本橋より七里 布田あり

日野へ二里 旅舎多し 新宿本宿番場 舊名を小野縣と称せ武蔵國

八丁あり 宿等の名あり 府中へ上古國造居館の地あり和名類聚抄中も武蔵國府を

多麻郡小ありと載り 徴とせへ 延喜延長の頃一變して此辺

をへし小川郷と稱す 風土記曰小川郷公穀二百六十七束 又其後小野小

川の称止て府中領と總称せ尚此郡玉川を境と川南を多

西郡川北を多東郡とも稱し 古文書小々々々

越前越後皆 府中と稱せり 常陸對馬長門

